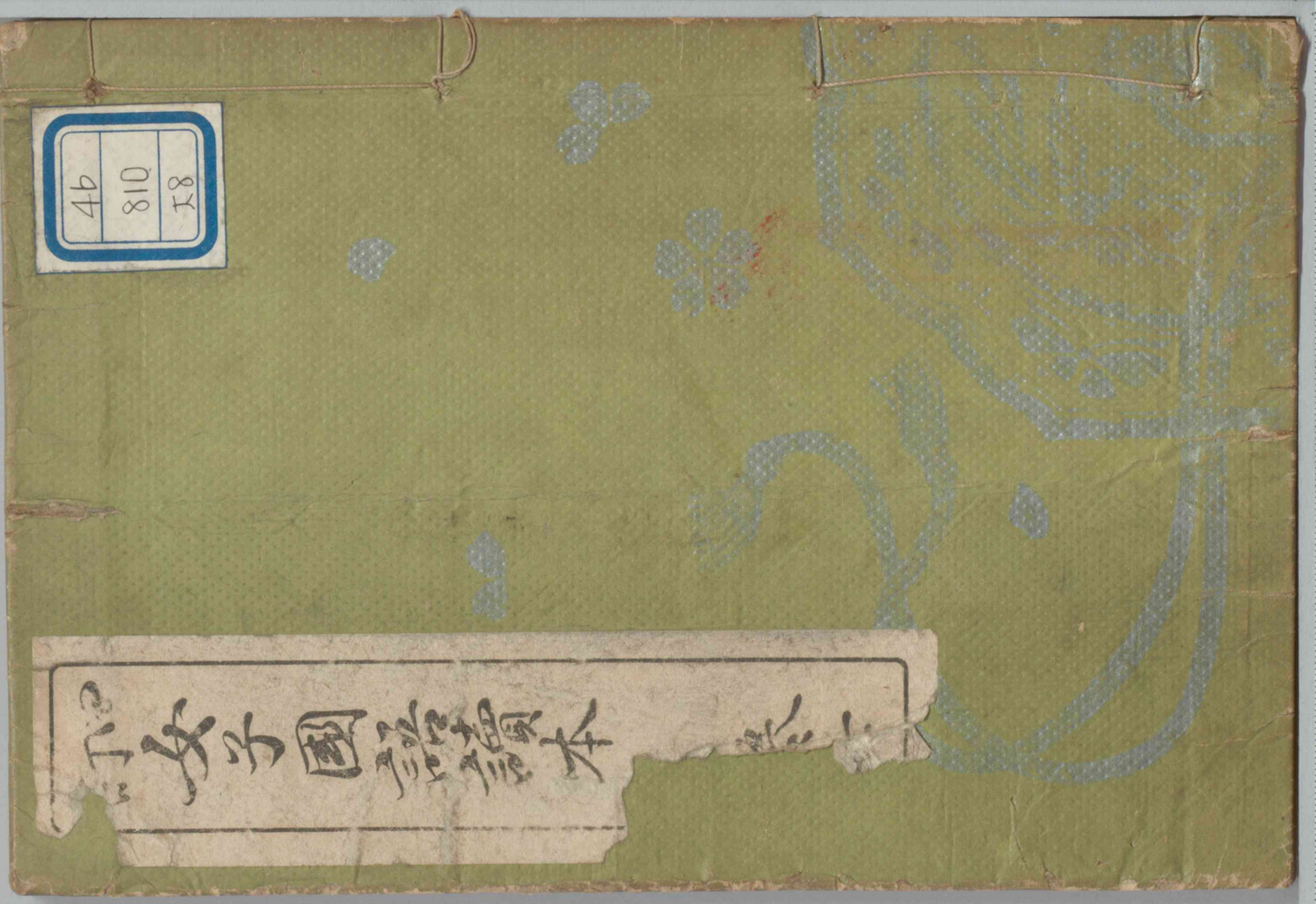
42158
教科書文庫
4
810
42-1919
200DO
79816

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak



46
810
大8

大正八年二月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

吉田彌平
小島政吉
篠田利英
岡田正美
共編

四訂 女子國語讀本 卷七

東京
金港堂書籍株式會社

資料室

四訂 女子國語讀本卷七

目次

一 世界戰爭の勃發並に經過……一
二 宣戰の詔書……一四
三 九十の春光……文學士 大町桂月……一八
四 自然界は吾人の良師なり(口語文)……二七
五 さゞれ水(新體詩)……文學士 武島羽衣……三三
六 品性……三六
◎猫と鼠(口語文)……文學士 夏目漱石……四〇
七 ウォシントンの母……四三

広島大学
教
79816
図書

八　北村朴翁の妻（口語文）……下田歌子……四九
九　柏餅（狂句）……五四
一〇　家庭……五五
一一　をさな兒……小林一茶……六一
一二　親族……法學博士　添田壽一……六四
一三　沖つ遠山（短歌）……七二
一四　櫻井の宿……太平記……七五
一五　母の教訓……太平記……八〇
一六　四條畷（新體詩）……中村秋香……八三
◎親心（口語文）……文學博士　坪内雄藏……八八
一七　戰場に在る兵卒のその妻に贈りたる書（候文）……九三

一八　熊王の發心……吉野拾遺……九六
一九　越後の海岸（口語文）……尾崎紅葉……一〇一
二〇　山路の物語……堀秀成……一〇六
二一　雨の夜……樋口一葉……一一四
二二　讀書の選擇……文學博士　佐々政一……一一七
◎牛乳縱覽（口語文）……理學博士　坪井正五郎……一二三
二三　風雅の嗜……德富蘇峯……一二五
二四　懈怠心……兼好法師……一三一
二五　鵜戸窟（口語文）……德富健次郎……一三五
二六　待賢門の戰……平治物語……一四一
二七　浮草（俳句）……一四六

二八　わが國の海運……一四七

四訂 女子國語讀本卷七目次 終

四訂 女子國語讀本卷七

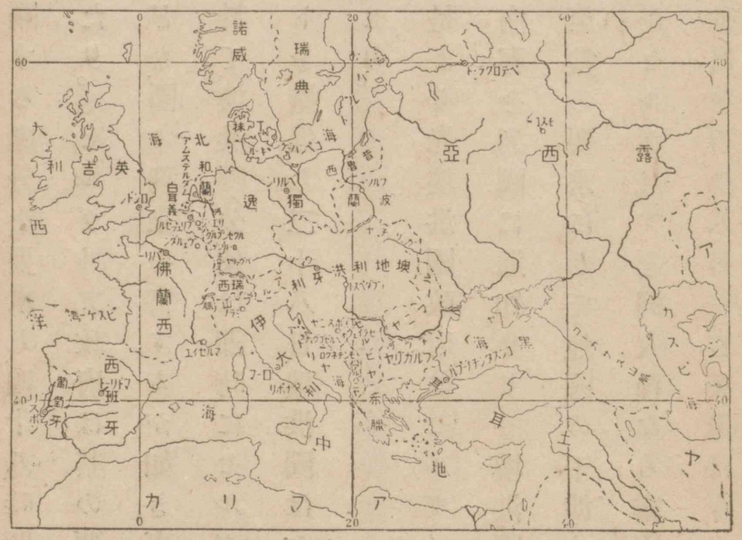
一　世界戰爭の勃發並に經過

我が大正三年、西暦一千九百十四年、六月、墺洪國政府はボスニア・ヘルツェゴヴィナに於ける軍團の演習を行へり。皇太子フランツフエルヂナンド大公は老帝に代り往いて之を統監し、二十七日事了りぬ。即日、大公はイリツの溫泉に赴き、こゝに妃と共に此の日を過し、翌二十八日、豫定に隨つてボスニアの首府セラエーヴォに赴く。午前九時五十分市の停車場に着し、妃と自働車に同乘して歡迎會場なる市

(一) 墺洪國の南端にして東はセルヴィア・モンテネグロに界す。
(二) フランツ、ヨセフ

役所に臨まんとす。路は右方ミリヤッカ河の岸にそひ、左に高等女學校を見てクムリヤ橋の橋詰に至らんとする時、拜觀の群集中なる一人の青年、突然黑き小箱を大公の車中に投付けたり。大公は何心なく之を取りて投出したる一刹那、猛然爆發して陪從の武官を傷けたり。

然れども、歡迎式は事なく終了せり。大公は傷きたる武官を陸軍病院に慰問せんとて、再び車を驅りて前の河岸通を引返し、クムリヤ橋より右に折れて大通りに出でたる時、又もや一青年あり、車中を目がけてピストルを連發したり。妃は銃聲を聞くと齊しく、急ぎ身を以て大公を掩ひたれど、銃丸皆命中して、あはれ大公も妃も同じ枕に仆れて事きれぬ。



歐洲地圖

兇行者は前後とも直ちに捕へられたり。審問するに、事件は隣國セルヴィアの秘密集團及び、高級武官に關係せり。墺洪國の人心は激昂を極めたり。墺洪國政府は七月二十三日午前六時を以て、セルヴィア政府に最後通牒を發して、犯罪者及び、秘密運動に

關する處分を要求し、四十八時間内に決答せんことを求めたり。セルヴィア政府は其の要求の大部分を承認せしかども、國の獨立を害するが如き事項は斷然拒絶せり。是に於て、墺洪國公使は卽時にセルヴィア國の首府ベルグラードを撤退し、二十八日、墺洪國はセルヴィア國に對して宣戰せり。

是より先、墺洪國政府はセルヴィアに與へたる最後通牒の内容を列國に通知せり。墺洪國の同盟國なる獨逸は、これ至當の要求にして他國の干涉すべき者に非ずと聲明せしが、セルヴィアと同人種なる露國は是に反對して、兩國遂に動員を行ひ、八月一日、獨逸は今日以後露國と敵國たることを宣言し、翌二日、露帝も亦宣戰の詔を發したり。されば、露國の同盟國たる佛國も亦動員を行ひて、翌三日、獨逸と敵國たることを表明せり。

かくて、獨軍は露軍の準備著しく遲延するを利用し、先づ佛國を粉碎して、然る後、露國に向はんとせり。然れども、獨佛國境の方面には堅固なる要塞あるを以て、獨逸は道を白耳義に假りて、容易に佛國に入らんと欲し、之を白耳義に强要せり。白耳義は小國にして大國の間に介在するを以て、有事の日には其の中立を尊重すべきこと、英獨間にも條約あり。因りて、英國は獨逸に向つて白耳義の中立尊重の保證を要求せしかども、獨逸は之に應ぜざるを以て、八月四日、英

國も亦獨逸と交戰狀態に入るを宣言せり。

當時、歐洲に在りては、一方に獨逸・墺洪・伊太利の三國同盟あり、一方に英・佛・露の三國協商あり、相對して國勢の平均を保ちたりき。されば、伊太利は義に於て獨・墺に與すべきなれども、由來墺洪國とは利害相反すること多く、且、今度の戰爭は獨逸が好みて亂を招きし形跡あるを以て、同盟の義務なしとて、遂に中立を宣言せり。これに因りて、交戰諸國の一方は獨・墺の二同盟國を主力とし、一方は英・佛・露の三協商國を主力として、龍虎風雲の爭を現ずることとなれり。

余はこゝに一言を費さゞるべからず。墺洪國皇太子不慮の薨去は實に同情に堪へずと雖も、歐洲列强が一齊に兵を

執りて起つに至りしは、相互複雜の原因なくんばあらず。左に其の大要を語らん。

動亂の點火地となりしボスニア・ヘルツェゴヴィナ二州は元來土耳古の領地なりしが、明治十一年、露土大戰の結果、墺洪國は漁夫の利を得て、此の二州を無期限預り地として管理統治せり。是れ露國の不快とする所にして、セルヴィアは亦民族の關係上此の二州を自己の勢力地と信じたりき。然るに、明治四十一年、墺洪國は獨逸の後援に賴り、協商三國の抗議を顧みずして、二州を本國に合併せり。是れ露國・及び、セルヴィアが深く憤る所にして、セラエーヴォの變は實にこゝに根ざせり。然れども、國際の利害關係猶これより

大なる者あり。

今の獨逸帝は卽位以來海軍の擴張に熱心し、海上王の英國に代りて勢力を振はんと欲せり。是を以て、兩國競爭の間柄たり。露國は黑海より地中海に發展せん爲に土耳古を手中に收めんことを欲し、獨逸は鐵道に由りてペルシァ灣に出でんが爲、亦土耳古を手中に收めんと欲せり。佛國は獨*佛戰爭の舊怨を忘れず、アルサス・ローレーヌ二州を獨逸より奪ひ還さんと欲せり。是等の關係共同し、就中、英獨の爭覇此が主力となり、セラエーヴォの一發その導火となりて、俄然として爆裂したる者、これ今度の大戰なり。

さる程に、獨逸軍は國際公法を蹂躙して、八月四日、白耳義に

*1870

進入し、同二十日、リエージュ要塞を陷れ、將に長驅して巴里を衝かんとせり。佛軍は不意の攻擊に狼狽しながら、巧みに兵力を此の方面に移動したれど、佛軍は七十五萬、獨軍は百萬、佛軍遂に敗れて巴里に近きマルヌ河の線に退却せり。九月、英佛軍百十萬、十分なる準備を以て逆擊しければ、獨軍遂に退きて北方約十里なるエーヌ河の線を保ち、破竹の勢こゝに一頓せり。此の間、露國は東方より進軍して、一部は獨逸の東普魯西に進入し、一部は墺洪のガリシアに進入したるが、東普魯西方面の軍は獨軍に擊退せられぬ。

爰に、吾が日本は日英同盟條約に基き、東洋の平和を維持せんが爲、八月二十三日、獨逸に宣戰し、支那山東省なる獨逸の

青島要塞を攻めて猛烈なる砲擊をなし、十一月七日、之を陷れぬ。吾が國は、又、英國海軍と共同して、東洋に横行せる獨逸の軍艦を掃盪し、及び、南洋なる獨領諸島を占領して、列國の東洋通商をして安寧ならしめたり。蓋し、是皆日英條約に基くと雖も、亦、往年の三國干涉の主謀者たりし獨逸に向つて一矢を酬いたるものならずんばあらず。

砲烟の中に年あけて、大正四年となりぬ。五月、獨軍は二百二十萬の兵を以て大に露軍と戰ひて波蘭地方を取り、破竹の勢を以て前進すること百三十里に及べり。是主として露國の戰備完からざるに因れるなるを以て、吾が國の如きは極力兵器を製造して露國に供給せり。西方に於ては、伊太利が英佛側に加入せるありと雖も、戰況捗々しからず、動もすれば獨軍に乘ぜらるゝ形勢あり。是獨逸が積年心を軍事に盡し、豫め今日の準備をなしたるに由れり。

然れども、英・佛・露・伊の四强國に圍まれて連年惡鬪せる獨逸は、物資漸く窮乏し、兵士漸く低劣となれり。大正五年二月、獨軍必死の力を振ひて佛のヴェルダン要塞を强攻し、爾來數月、五十五萬の兵士と一千五百萬發の砲彈とを費して遂に志を得ず、こゝに其の疲弊を露さんとせり。

此の年五月、獨逸海軍の主力艦隊は英國の艦隊と丁抹海上に遭遇し、一大海戰を開始したるが、決戰を避けて自國港灣に歸りぬ。蓋し、獨逸海軍は自ら英國海軍の敵に非ざるを

知り、敢て出でて戰はざるなり。

大正六年に至りて、獨逸は益〻疲弊し、英佛の戰況漸く好望を呈せり。然るに、三月、露國に內亂起り、帝室を廢し、新政府を建て、是が爲に、露國は秩序紊亂して、戰爭不可能となれり。是より先、獨逸は潛航艇を以て敵國其の他の船舶を擊沈せしが、六年一月以後は如何なる船舶に對しても無警告に擊沈せんことを通告せり。米國は其の人道に悖ることの甚しきを以て、四月六日、獨逸に宣戰せり。此の頃、我が海軍艦隊は地中海に出動して協商國艦隊の作業を助けたり。

大正七年三月、獨逸は露國と和し、此の方面の兵を西部戰場に送りて、英佛軍と決戰せんとす。かくて、獨軍攻擊を始め、

死物狂の肉彈戰を强行し、七月中旬、進みてマルヌ河を渡りしが、佛軍猛然として攻勢を取り、獨軍遂に後退を始めたり。」

是より先、獨墺軍の露國に捕虜となりたりし者、露國の親獨派と結びて西伯利亞に橫行しければ、吾が國は兵を出して協商國軍の主力となりて之を討てり。

既にして獨墺側の同盟國は疲弊の極に達し、東部なる勃牙利・土耳古の二國先づ聯合軍に屈服しぬ。西部戰場には獨軍の後退猶止め難く、協商軍既に獨逸の國境に臨めり。是に於て、さしもの獨軍も術計盡きて休戰を乞ひ、協商軍提出の條件を盡く承諾しければ、十一月十一日、遂に兩軍休戰せり。講和會議は大正八年に入りて開かるべし。

かくの如くにして世界戰爭は前後五年にして初めて收りぬ。兩軍の死者合計約八百萬、傷者三千萬、軍費三千億圓に上る。産業は荒廢し、物價は暴騰し、都市は破壞せられ、名所・舊蹟は蹂躪せられ、飢餓の民、傷癈の兵、父を失へる子、夫を哭する妻、到る處に充滿ちたり。講和の後、所謂國際聯盟成立し、審判・制裁の方法具るとも、永久絶對の平和は保證すべからず。人として世に立たん者、德に進み、業を修め、儉素に慣れ、忍耐力を養ひ、一は以て戰爭の害に遠ざかり、一は以て有事の日に備へざるべからざるなり。

二　宣戰ノ詔書

大正三年八月廿三日午後五時五十分公布

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ獨逸國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク力ヲ極メテ戰鬪ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク職務ニ率循シテ軍國ノ目的ヲ達スルニ勗ムヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ必ス遺算ナカラムコトヲ期セヨ」

朕ハ深ク現時歐洲戰亂ノ殃禍ヲ憂ヒ專ラ局外中立ヲ恪守シ以テ東洋ノ平和ヲ保持スルヲ念トセリ此ノ時ニ方リ獨逸國ノ行動ハ遂ニ朕ノ同盟國タル大不列顛國ヲシテ戰端ヲ開クノ已ムナキニ至ラシメ其ノ租借地タル膠州灣ニ於

*支那山東省

テモ亦日夜戰備ヲ修メ其ノ艦艇荐ニ東亞ノ海洋ニ出沒シテ帝國及與國ノ通商貿易爲ニ威壓ヲ受ケ極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ是ニ於テ朕ノ政府ト大不列顛國皇帝陛下ノ政府トハ相互隔意ナキ協議ヲ遂テ兩國政府ハ同盟協約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護スルカ爲必要ナル措置ヲ執ルニ一致シタリ朕ハ此ノ目的ヲ達セムトスルニ當リ尙努メテ平和ノ手段ヲ悉サムコトヲ欲シ先ツ朕ノ政府ヲシテ誠意ヲ以テ獨逸帝國政府ニ勸告スル所アラシメタリ然レトモ所定ノ期日ニ及フモ朕ノ政府ハ終ニ其ノ應諾ノ回牒ヲ得ルニ至ラス

朕皇祚ヲ踐テ未タ幾クナラス且今尙皇妣ノ喪ニ居レリ恆ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ而カモ竟ニ戰ヲ宣スルノ已ムヲ得サルニ至ル朕深ク之ヲ憾トス

朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ宣揚セムコトヲ期ス

御名御璽

大正三年八月二十三日

内閣總理大臣兼内務大臣　伯爵　大隈重信
農商務大臣　子爵　大浦兼武
外務大臣　男爵　加藤高明
陸軍大臣　岡市之助
海軍大臣　八代六郎
大藏大臣　若槻禮次郎
文部大臣　法學博士　一木喜德郎

司法大臣　尾崎行雄
遞信大臣　武富時敏

名は芳衛、文學士、國文家。

三　九十の春光

大町桂月

一

秋の風は泣くなり、冬の風は怒るなり、春の風は笑ふなり。春の風の吹くところ、そこに淡雪消えて若菜もえ、谷川の氷とけて波の花まづ咲く。枯木活きて芽を吐き、燒痕よみがへりて蕨の柔拳空をつかまんとす。二十四番の風吹きつくして、梅さき、桃さき、櫻さき、九十の春光到るところ駘蕩として、人は花に送られ、花に迎へられて、心おのづからのどかなり。

春は命なり。萬物みな活きて動く。春は愛なり。天地共に笑ふ。少女を人生の春とすれば、春は天地の少女なり。

二

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるが故に、墻籬の中にとざされども、櫻は幸に食はるべき果實をもたず、野に山に、到る處、春を飾る。これ櫻ならでは得べからず、又、日本ならでは求むべからず。我が日本を櫻花國とは、言ひ得て切なるかな。櫻は多きをよしとす。一目千本、滿山みな櫻、朝陽と相映發す。何等の美觀ぞや。されど、人跡絶えたる山奥、清水ちよろ〳〵と流るゝあたり、よしや事を解せざる詩人は紅葉と

共に夜の錦になずらふとも、その梢とも見えざりし一本の櫻の、花にあらはるゝも、亦興あらずや。

散るを惜むは、櫻を愛する所以にあらざるべし。一陣の春風に、千片また萬片、惜氣もなく枝を辭して、空に香雪を漲らし、地に錦繡を布く。一二片雨に和して行人の顏をうつも、また惡しからず。櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。

黃昏一犂の雨、入相の鐘を傳へて、十里の長堤、春漸く老いんとす。知らず、江上の漁翁、網し得たる白魚と落花といづれか多き。

三

おぼろ月夜に、漫歩して歸る。習々たる東風、面を吹いて寒

※深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり。

からず。林下の一路、白模糊として、一脈の清香骨に徹す。

嗚呼、月の影、梅の香、古人(一)をしてしくものなしと咏ぜしめしも、かゝる夜なりけん。

梅に取るべきは、馥郁たるその香、奇古なるその幹。花の色は白きを尙ぶ。あかきは俗なり。一園内に行儀正しく列植するは、折角の梅花を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影を清淺(二)の水に横たへ、黃昏一片の月を添へて、暗香四野に浮動す。

これ既に林和靖(三)に言ひつくされたれど、梅花此の境を得て始めて奇をあらはし、此の境梅花を得てはじめて俗氣を脫す。梅園に多く短册をつるすは、風流に似て却て俗なり。

梅の雪を冐して咲くいさましさにひきかへて、萎みながら

(一)照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき。

(二)疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏。

(三)支那の宋の詩人、名は逋。

枝に殘れるは、年老いたる女の白粉を粧へるが如し。厭ふべきなり。

四

菜花一路、胡蝶人と相追ふ。春風の行方それと知られて、柳の糸靡くともなく動く處、水車緩く回り、はねつるべ音なくして、小犬籬根に眠る。遙かなる桃林の上に塔尖の出づるは、伽藍あるにや。詣でて歸るとおぼしき村娘のひとむれ、相和して歌ふ聲漸く遠く、漸く細く、つひに霞の中に消えゆく。

五

春日うらゝかにして、梅花一庭に薫ず。小猫縁にうづくまり、少女二人追羽子をつく。風死して、空にうなりし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひとり高く盤旋す。

六

見渡すかぎり、菜花の黄、麥浪の青きに連り、遠山かすみて、低し。かげろふもゆる野の空高く、美音囀喨天樂をきく心地し、天使人間に近づきて、天の祕密を語るかと疑はる。諦視するに、其の處を知らず。かくて、日西に沈まんとす。一羽の雲雀、その聲をのせ來りて麥生に落つ。淡月一痕、家路に歸る農夫のかつげる鍬にかゝれり。

七

春の花の大觀は、櫻と梅とにつきたれど、春信まづ福壽草に

やどるも可憐ならずや。桃紅李白世に俗なりと言ひふらされたれど、場所によりては、趣あり。椿の花ぽつりんと水に落ちて波輪を起すも、閑適の趣なしとせず。菫・蒲公英のやさしき、木蓮の氣高き、見もてゆけば、限あるべしとも覺えず。山吹・牡丹・芍藥・菖蒲・藤、滴るが如き新綠、これ人間の春にもれたれど、天地の春を粧はずんばあらず。

八

春を飾るものは第一に花なり。天地美裝す。第二に鶯・歸雁・雲雀なり。自然の音樂をなす。第三に暖氣なり。寒からず、熱からず、心自ら草木と共に舒ぶ。第四に霞なり。日光之に當りて、景致和ぎ、月影之に映じて、夜色更に幽なり。

九

春雨また春の一觀たらずんばあらず。大空は霞むとも雨降るとも未だわかぬまに、青柳の糸はや玉ぬきそむとは、契沖の咏ぜし所、蓑きてくだす筏士にかすむ朝の雨を知るとは、千蔭の歌に、入りし所なり。ふるとも見えぬ雨に、黃塵收り、俗客去りて、天地自らしめやかなり。閑窓の下、靜に碁に對して一層の幽寂を感ず。

十

佐保姫春を司り、立田姫秋を司る。請ふ、余をして二樣の神として、相對比して想像せしめよ。佐保姫は優婉なり。曲眉豐頰、二重瞼の目元愛くるしく、丸顏にして白く、ふとりた

(一) 浪華の僧、國學者、元祿十四年歿す。

(二) 江戸の和學者、文化五年歿す。

るにあらざるか。立田姫は清淑なり。鼻高く、口元りゝしく、眼すゞしく、顔少し長く、體やゝ痩せたるにあらざるか。佐保姫は溫和なり。春の初風の暖きが如し。立田姫は爽快なり。秋の初風のこゝちよきが如し。立田姫は嚴肅なり。怒りて淅瀝の聲をなす。佐保姫は寛厚なり。藹然としてほゝゑむ。松蟲・鈴蟲はこれ立田姫の歌へるなり。鶯はこれ佐保姫のうたへるなり。櫻は佐保姫の衣なり。紅葉は立田姫の衣なり。霜白く、月淸し。これ立田姫の姿なり。霞にほひ、花かをる。これ佐保姫の姿なり。佐保姫は情あつき淑女なり。立田姫は意志强き烈女なり。しめやかなる春雨は、佐保姫の慈悲をあらはし、枯草におく秋霜は、立田姫の威嚴をあらはす。われは立田姫を敬し、佐保姫を愛す。（筆のしづく）

四　自然界は吾人の良師なり

此の世界を形成してをる自然物・並に、自然現象は、皆吾人の良師であつて、常に吾人に智德を授け、又、吾人を慰藉し、訓誡しつゝ、吾人を善道に導いてくれます。試みに海邊に立つて、あの廣い海原を眺めて御覽なさい。その時に、貴女方はどんな心地がせられるでありませうか。必ずや、心の中がいかにも晴々として、さうして、何かなしに大きな考が起るでありませう。吾人は、斯樣な處で世界を丸呑みにしよう

とする大望も起り、類少なき大事業を成遂げようとする考も起るのであります。奥深い森、木立の生茂つた山、風景の絶佳な勝地なども、やはり海洋と同様に、えらい人を養成するといふことで、古人も「山水秀麗の地、よく偉人を生ず」といつておかれましたが、如何にも其の通りであります。

嚴冬に、常磐樹の霜雪にめげずして獨り青々としてをるのは、吾人をして節操の德を養はしめますし、霜雪の苦艱を經た梅花の、早春に百花に魁してほゝゑむのは、吾人をして忍耐の精神と剛健の氣象とを涵養せしめます。又、彼の蟻が炎熱赫々たる夏の日に於て、孜々として勤勉してをるのは、自ら吾人をして勤勉の心を起さしめ、蜜蜂の營々として相共に勤めてをるのは、自ら吾人をして共同一致の心を生ぜしめます。其の他、櫻花の爛漫たる、菊花の馥郁たる、皆吾人をして優美高雅の觀念を起さしめます。

「烏に反哺の孝あり」、「鳩に三枝の禮あり」といふことを昔から申しますが、是等の動物の行は、又、吾人をして孝心を深からしめ、禮節の重んずべきことを知らしめます。又、彼の鳥獸などの其の雛を愛養し、其の仔を撫育する有様は、吾人をして益親子の情愛をこまやかにし、あたゝかにいたさせます。又、動物と植物と、或は動物と動物とが相互に助けたり助けられたりして、所謂共同生活をしてをるところは、吾人をして共同心を興さしめ、又、公德心を養はしめます。

谷川がいくつも〳〵集り合つて、漸く大きな河になり、終にかの廣い深い海になり、又、一杯の土、一片の石が積り積つて山をなすのは、一滴の水も集れば海となり、一塊の塵も積れば山となると云ふ格言を實際に明示してをるもので、吾人はこれに依つて勤勉の大事なことや、小事を忽せにしてはならぬことや、また、相共に力を協せて事業を營むことの必要なことなどを、知ることが出來るのであります。又、四季の變化や、生物成長の有樣などは、吾人をして社會に秩序のあり、物事に順序のあることを了解せしめます。又、植物の葉は炭酸分解の作用を營み、澱粉を造り、根は地中より養分を吸收し、且、莖幹を支へる働きをなし、莖幹は養分の通路となり、花瓣は色によつて昆蟲の注意をひき、蜜腺は甘き汁を出して昆蟲を招き、雄蕊は花粉を造り、雌蕊は之と協力して種實を結び、甘藷の塊根、馬鈴薯の地下莖の如きは、養料の貯藏をしますが、是等は吾人に分業的事業の必要とその利益とを教へてくれます。

彼の霹靂たる雷鳴、閃々たる電光は、(一)フランクリンをして電氣を發見せしめ、また、一林檎の墜落は、(二)ニュートンをして地球の引力を發見せしめ、一個の鐵瓶より騰る沸々たる湯氣は、(三)ワットをして蒸氣機關を發明させました。此の他、一疋の蛙は、(四)小野道風を奮發させて、遂に一世の書家たらしめ、一疋の蜘蛛は、(五)ウキリアム、ワレースを落膽の淵より救ひ上げ

(一)米國の愛國家、避雷針の發明を以て名高し。
(二)英國の數理學者。
(三)英國スコットランドの人。
(四)平安朝時代の能書家。
(五)英國スコットランドの人。

て、遂に成功の域に達せしめました。

斯樣に、自然は過去に於て、又、現在に於て、吾人に智德を授け、又、授けつゝあるのであります。植物の根の生じ、新葉の萌え、莖の伸び、花の開き、種子の實り、或は鳥の鳴き、蝶の舞ひ、蛙の游ぎ、魚の跳り、犬の走り、馬の嘶き、獅子の吼ゆるなど、皆一つとして無意味なものはありません。實に、自然物も自然現象も皆深い意味を持つて居るのであります。されば、吾人は自然物や自然現象を漫然として見過すやうなことがあつてはなりません。

（「自然界の微妙」に據る）

五　さゞれ水

武島羽衣*

*名は又次郎、文學士、日本女子大學校教授。

見るかぎり果もなき
大空と一つなる
草原をよこぎりて
流れたる清水あり。

別れゆく横雲に
茜さすあしたには、
照りそむる朝日子と
むつまじく語りつゝ。

たゝなはる遠山の

うすれゆくゆふべには、
影見ゆるゆふ月と
へだてなくむつれつゝ。

ひかりなき闇の夜も、
てる星の慰めに
面白き音に立てゝ、
折の歌うたひつゝ。

とことはに流るれど、
しかも、なほたゆみなく、

とことはに望めども、
しかも、なほ足らひつゝ。

げにや、世のかゞみとも
輝けるさゞれ水、
人みなの心をも
なれがごとあらしめよ。

清らかに、樂しげに、
たゆみなく、かはりなく、
進みつゝ、のぼりつゝ、

なれがごとあらしめよ。

六　品性

人の尊卑は何によりてこれを判つべきか。かの飽食暖衣大廈高樓の内に住み、世間生活の辛苦を知らざるもの尊くて、弊衣粗食、草屋茅舍の内にわづかに雨露を凌ぐもの卑しきか。かの財力あり才能ありて、人の上に立ち、おのれは拱手して、數多の人を頤使するもの尊くて、人に使役せられ、日夕營々として勞動するもの卑しきか。世或は然りと答へん。われらはその必ずしも然らざるをいはんと欲す。何れの職業を問はず、完全無缺にその效を擧げんことは、尋常一樣の才能にては難けれども、只一通り之を行ふには、さまで素養と才能とを要せざる職業あり。中には、只一通り之を行ふにも、頗る素養と才能とを要するものあり。然れども、前者に從事する者を直に卑しとし、後者を直に尊しとせんは、これ亦我等の意を得たるものにあらず。

生活の程度も、職業の種類も、人の尊卑を定むる標準とすること能はずば、われらは畢竟何を以て人の尊卑を定むるぞといふに、その標準は他にあらず、その人の心事の高潔なると卑劣なるとの差にあり。即ち、品性の如何にあり。

世間、財力ある者その財力を働かせて事業をなすに、眞成に國家の發達を助成すべき意志ありて、之をなす者あらん、又、

口には美辭を列ぬれども、その心には私利の外なき者もあらん。かの才能ある者、その能を抱いて要路に立つに、その地位によりて眞成に國家の發達をはかるに怠らざる者あらん、また、その地位を利用して竊に私利をはかるに遑なき者もあらん。つら〳〵天下の大勢を察するに、その後者に屬する者、多く威勢を有して社會に濶歩し、清廉の士は、その汚濁なるに堪へず、目を閉ぢ耳を掩うて、見ることなく聞くことなからんと欲するが如し。これ、何の故ぞ。他なし、社會が人の尊卑を定むる標準を誤れるによれるなり。すなはち、社會は人の外觀とその地位とを見て、その品性の如何を問はざるものゝ如し。品性下劣なれども、威容を壯大にし、

勢力ある地位に據れるものをば、見て以て尊しとす。かくの如くにして、これらの輩が、ます〳〵社會に跋扈するに至るは、自然の勢なり。

前途有望なる諸子は、この忌むべく悲しむべき天下の大勢を趁うて走るべからず。諸子が、將來、社會に出でん日、その執るべき職業は種々なるべし。その立つべき地位は、また、種々なるべし。然れども、その職業とその地位との如何を問はず、その心事は必ず高潔ならざるべからず。その行爲は必ず清廉ならざるべからず。諸子がみづから期することかくの如くにして、而して、人の尊卑を品評するには常に標準をその人の品性如何に取らば、卑劣なるもの、汚濁なる

ものは、おのづから社會の制裁を受けて、その勢力を失墜し、高潔なる者、正大なる者はおのづから勢力を得て、天下の風潮はこゝに一變し、汚濁の空氣こゝに一洗せらるゝに至らん。よくかくの如くならんか、國家の發達は必ず刮目して見るべきものあらん。アモス、ローレンスいはく、「人に必要なるは、富にあらずして、品性なり。縱令、全世界を手にすとも、その品性を缺かば、何かせん。」と。まことに然り。

（青年修養訓に據る）

(一) 米國の豪商。

(二) 名は金之助、文學士、小說家。大正五年歿す。

◎ 猫と鼠

夏目漱石

吾が輩は猫である。吾が輩は今夜こそ鼠を捕つてやらうと思つて、種々作戰計畫をめぐらして居たが、夜はまだ淺い、鼠はなか〳〵出さうにない。大戰の前だから、一休養を要する。

勝手には引窓がない。座敷から欄間と云ふやうな處が幅一尺程切拔かれて、夏冬吹通しに引窓の代理を勤めて居る。惜氣もなく散る彼岸櫻を誘うて、さつと吹込む風に驚いて目をさますと、朧月さへいつの間にさしてか、竈の影は斜に揚板の上にかゝる。寢過しはせぬかと、二三度耳を振つて、家内の樣子を窺ふと、しんとして昨夜の如く、柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でごと〳〵と音がしだす。小皿の緣を足で抑へて、中をあらして居るらしい。こゝから出るわいと、穴の横へすくんで待つて居る。なか〳〵出て來る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度は井か何かにかゝつたらしい、重い音が時々ごと〳〵とする。而も、戸を隔てゝすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと、直徑にしたら、三寸も離れて居ぬ。時々はちよろ〳〵と穴の口まで足音が近寄るが、又、遠のいて、顏を出さぬ。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾が輩はぢつと穴の出口で待つて居らねばならぬ。隨分氣の長い話だ。鼠は旅順椀

の中で盛に舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩の這入れるだけ、おさんが此の戸を開けて置けば善いのに。

今度はへつついの陰で吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたぎり、流しの下へ隱れてしまつた。しばらくすると、風呂場でうがひ茶碗が金盥にかちりと當つた。今度は後方だと振りむく途端に、五寸近くある大きな奴がひらりと齒磨の袋を落して、緣の下へ駈込んだ。逃すものかと續いて飛びおりたが、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らぬ。

吾が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の眞中に頑張つて居ると、三方面とも少々づゝ騷ぎ立てる。小癪と云はうか、卑怯と云はうか、到底彼らは君子の敵でない。吾が輩は十五六回はあちらこちらと氣を疲らし心を勞らして奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。殘念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、如何なる東鄕大將も施すべき策がない。始めは勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯と云ふ崇高な美感さへあつたが、遂には面倒と馬鹿げて居るのと眠いのと疲れたのとで、臺所の眞中へすわつたなり動かれないことになつた。しかし、動かないでも八方睨みをやつて居れば、敵は小人だから、大した事は出來ないのである。目ざす敵と思つたものが、存外つまらないと、戰爭が名譽だと云ふ感じが消えて、にくいと云ふ念だけ殘る。にくいと云ふ念を通り越すと、張合が拔けて、ぼうつとする。ぼうつとした跡は、勝手にせよ、どうせ氣の利いた事は出來ないのだからと、輕蔑の極、眠たくなる。吾が輩は以上の徑路をたどつて遂に眠たくなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前に在つても必要である。（吾が輩は猫である）

七　ウォシントンの母

十八世紀の年光將に盡きなんとせるとき、北米合衆國の建

設者たるジョージ、ウォシントンは、マウント、ベルノンの閑栖に於て靜かにこの世を辭し去りしが、未だ一年ならざるに、この偉人の母も八十七の高齡を以て、簡素にして幸福なりし生涯を終へて、安らかに永遠の眠に就きぬ。千八百三十三年五月七日、この偉人の母のために建設すべき記念碑の定礎式は、いと莊嚴に、且、盛大に擧行せられたり。當日、大統領アンドリユー、ジャクソンのなしたる演說は頗る會衆を感動せしめたるものゝ如し。今、左にその一端を錄せん。

今ウォシントン老夫人の主義と行狀とを追憶せんとすれば、勢ウォシントンその人を想ひ起さゞるを得ず。實に、この母とこの子との運命は相纏綿して分離すべからざるものあるなり。

ウォシントンが品格の偉大なりしは、諸君のまのあたり見られし所なり。その市民として、武人として、乃至、文人としての生活は、また諸君の熟知せらるゝ所なり。若し人類にかゝる評語を下すを得べくば、彼は實に誤謬なき判斷を有せる人なり。その目的や誠實、その主義や高潔、自重の心、自信の念、極めて篤し。その事に當るや、細檢精査、その兩端を叩き、原委を窮めずんば、容易に判斷を下すことなし。而して、その意一たび決するや、斷じて之を行ひ、毫も踟躕する事なし。千艱萬危も、之を視ること坦途の如し。わがウォシントンは實にかくの如き人なりき。

余は今眼を轉じてこの偉人の母と家庭とを見ん。吾人はこゝにかゝる偉大なる品格を助成すべき要素の、一として具備せざるなきを見る。言ふまでもなく、彼が偉大なる品格は天賦なり、生得なり。されど、若し彼に母の注意と判斷との之を指導することなかりせば、果して如何。いかんぞ道德と愛國と智慧との實例を世界に示して、一世を皷舞し後代を警醒すること彼が如くなるを得んや。或は天下民人の利害を擧げて自家の功名心を滿足せしむる資に供せしかも、また知るべからず。何となれば、是節制なき偉人の動もすれば陷り易き病患なればなり。嗚呼、この偉人の少時を回想し、その母の感化が全く偉人

の運命を左右したることを追想するは、我が國の女性に取りていかに必要なることぞや。苟もかの母の主義にして健全ならず、その愛情にして平正ならざりせば、その子の將來未だ知るべからず、從つて、我が國家の運命も亦未だ知るべからざりしなり。而して、吾人が今日我が國の女性の智德に關して聊か他に誇るべき長所あるを見るもの、これ豈この賢母と偉人とが吾人の前に赫々たる光輝を放てる結果にあらずや。思ふに、世の母たるものの、此の世に於て最も滿足を感ずるは、その子女の德器を成就せるを見るにあり、その子女の社會に活動して事を成し名を揚ぐるを見るにあり。而して、その子女により

て己も亦世人に嘆美せらるゝにあり。ウォシントン老夫人の如きは、實に此の上なき滿足を以てその生涯を終へられたるものと謂ふべし。

かくて、記念碑は成れり。その銘に曰く、「ウォシントンの母メーリー」と。何ぞ其の語の甚だ簡約にして、意味の極めて深長なるや。思ふに、過去八十年の間、幾多の女性に向つて無言の雄辯を揮へるものは、この記念碑なり。而し、し、未來永劫に亙りて不斷の教訓を垂れんものも、亦この記念碑なるべし。（歐米名士の家庭に據る）

*女子教育家、實踐女學校長。

八　北山朴翁の妻

下田歌子*

信州松代藩の醫師北山朴翁の妻は、有名な佐久間象山の姉である。幼少の頃から弟の象山と同樣に人なみすぐれて才氣のある、俊敏な、活潑な少女であつたが、父母は其の餘りに男らしく、且、鋭敏な性質を氣づかつて、「此の子に學問などをさせたら、親の手に餘るやうなものにならうも知れぬ。」といつて、專ら手藝を修めさせた。「悴があゝいふ氣性で、何事をしでかすかも解らぬから、娘の婿はなるべく柔順な、篤實な人を選ばねばならぬ」といふので、遂に北山家へ嫁せしめることにした。如何に氣性が逞しくても、さすが家庭の訓が嚴しいので、拒みかねて思はぬ人に嫁いだのであつた。夫の朴翁は、甚だ寡言の質であつたので、人となりも、又、其の

*幕末の開港論者、元治元年京都にて攘夷黨に暗殺せらる。

短所も知れなかつたのであるが、さて、其の家に立入つて見れば、誠にもどかしい事ばかりなので、刀自は一時失望の餘り、病にも沈まうとしたが、さすがに利發な婦人であるから、我と心を勵して、かゝる處に嫁いだのも、遁れ難い宿緣であらうから、いかにもして夫を助け、世に立つて恥かしからぬやうにせねばならぬといふ決心を起し、それからといふものは、夫が往復の書信より、他との應對の詞に至るまで、一切にわたつて助言を與へぬことなく、殆ど巧な人形使が操人形を使ふが如く、又、恰も慈母が小兒を敎ふる如くにもてなした。

夫の朴翁は才氣こそ無けれ、もと正直篤實な人であつたから、深く妻の內助に信賴して、何一つとして獨斷專行を敢てせず、思ひ惑ふことは、一々妻に相談して取行つたが、妻の助言は何時も其の當を得て居つた。それ故、夫の評判もだんだん好くなつて、生活も次第に餘裕があるやうになつた。

それで、刀自はます〳〵奮つて、夫を助け、子を敎ふることに力を盡し、家の內には常に春風が滿ちて居つた。

刀自は生れながらにして文學の才があり、又、愛國の念が深く大局に通じ、巧思に富み、生家の弟にも助言して其の大望を達せしめようとつとむるなど、實に丈夫の魂を具へた婦人であつたが、外見は甚だ柔和で、殊に繪畫・手工が上手であつた。其の巧思に富んだ例をいへば、一寸位の布片でも、織

方の珍しいものがあれば、これを解きほぐして見て、工夫して其の織法を悟つたといふことである。刀自は、初め、其の生家に在つた時分、弟の象山の修めた蘭學によつて理化學の知識を得たのであるが、それによつて機織器械も、自ら新意匠を出して調製させ、紋樣の下畫も、自己の畫才を利用して種々に工風をした。又、染料の如きも、ある物は遠く之を長崎に求め、或は木の皮・草の實を取つて自ら試製し、我が家の緣の下に數十個の瓶をいけて、其所に染料を貯へておいた程である。斯の如くに、みづから紡織・染工・裁縫のことまでも擔當して、家人の衣服を調製し、あまりあるは賣つて家計を助けたので、北山家は次第に富裕になつた。

然るに、不幸にも刀自はまだ壯年の身で、夫に後れたので、その後は、專ら子女の教養に心を盡し、傍ら手工と文學・繪畫とを以て自ら慰めて居つた。刀自、或時、江戸在住の外孫に手製の物品を贈るとて、其の母・卽ち、我が女のもとへ、左の意味の手紙を贈つた。

別封の小袋は我が多年手織にしたさま〴〵の切の端の細かいのを繼合せたのであるから、遠方にある祖母の手の跡であることを孫女に示して貰ひたい。なほ又、物は些少なりとも、捨てずに集めて置いて、丹精をすれば、有用の品になるものであることをも教へて貰ひたい。女子は殊更に儉素を勉め、緻密の性質を養ふべきものである

ことを忘れないやうにして貰ひたい。

刀自の如きは、誠に人の妻の好模範といつてよい婦人である。（良妻と賢母）

九　柏餅

柏餅、妹は乳母の手傳はず。
ようやくるぢやなかつて、母もお次まで。
雪をまねて獲物やつてきた。
本陣うちなつて出てゆく兄やどり。
角力を畫寢してゐる立角力。

一〇　家庭

家庭は女性の天地なり。その中、愛を以て滿さる。愛のある處、九尺二間の裏長屋にも、百花爛漫たる春を見るべく、愛のなき處、金殿玉樓と雖も、秋風落寞たる感なき能はざらん。愛は家庭の連鎖なり。夫婦・親子・兄弟・主從皆愛によつて結ばる。家庭の主人たるべき女性は、まことに愛の權化たらざるべからず。よし舅姑のために苦しめられ、從姉・從妹のために嫉視せらるゝことありとも、そは己が愛の力の足らざるものなることを自覺して、怨むることなく、怒ることなく、これに耐へ、これに忍び、報ゆるに渾身の愛を以てせば、何人かこれに感ぜざらん。見よ、頑强なる堅氷も、そよ吹く春

風には終に解け去るにはあらずや。愛はすべての力の中の最も強き力なり。

人はいふ「日本の家庭は父母兄弟同居するがゆゑに、風波常に絶えず。」と。これその一を知りて、未だその二を知らざるものゝみ。薔薇の刺あるを見て、その花を見ざるものあらば、人誰か其の愚を笑はざらん。蜂の螫あるを知りて、その蜜あるを知らざるものあらば、人誰かその痴を笑はざらん。舅姑同棲は、或は新舊思想の衝突によりて、感情意見の調和せざることもあらん。然れども、家事の整理に於て、隣保の交際に於て、子女の鞠育に於て、經驗あり熟練ある父母の、傍にあるあらば、その新夫妻の上に利益を與ふることいかばかりぞ。かの舅姑と新婦との相協はざるが如きは、家庭を組織する人々の人格にあり、組織の罪に非ざるなり。況や、妻たり婦たるもの、渾身の愛情を盡して、夫を助け舅姑に仕ふるあらば、感應の力は遂に頑嚚の人をも化して婉順の人たらしむべきをや。

偉人の大業を成すも、良妻内助の功に由ること多し。歐洲の外交界に辣腕を振ひたる鐵血宰相をして

予が妻に負ふ所の如何に多きかは、これを口にする能はず。

と云はしめたるビスマーク夫人の内助の功は、毫も外交に現れずして、而も、能く歐洲の天地を動かせり。英の(1)グラッ

(1) 獨國のビスマーク 1815—1893

(2) 1809—1893

ドストンは近世の政治家なり。彼をして英國の富を以て買ひえざる心の平和を得しめしものは、其の夫人カザリンの淑德なり。露の(一)トルストイは夫人の淨寫によつて一代の著述を印刷に附し、失明の經濟學者(二)フォーセットは其の夫人の助によつて斯學に貢獻せり。(三)ヂスレリーが大演說を試みんとして議會に急ぐ途次、同車せる夫人は馬車の扉の爲に指を挫かれしかども、其の事の夫の心を痛めんことを恐れて、苦痛を忍びて一言も發せざりきといふが如きは、實にこれ人の妻たる者の記憶すべき佳話にあらずや。妻たる道は此の如き獻身的愛情にあり。かの徒に巧言令色、夫の歡心を得ることをのみ謀りて、其の補助者たるべき實

(一) 1823—1910
(二) 1833—1884
(三) 1804—1881

を忘るゝが如きは、眞に人の妻たるものゝ道にあらず。從順は女性の美德なり。然れども、屈從は美德にあらず。

女子訓に曰く、

女子は內に在りては父母に從ひ、嫁しては舅・姑・夫に從ふと申すは、事新しく申すにも及ばず候へども、いかに夫の仰に背かざるが道にて候とて、夫の公の御法度に背き、惡事などいたし候を諫めざらんは、大いなる誤に御座候。いかにも詞あらだゝぬやうにみづからの心を鎭めて、しめやかに理を盡して異見いたし候が、妻たるものゝ道にて候。それも聲高にかしましく夫を罵り辱しむるはひがごとにて候。所詮は、自らの身正しければ、夫も妻の申

す事を用ひ、家内親類中も治り調ひ申すものにて候。

これ今もなほ女性の教訓とすべき言たり。

女性の身には、妻たる外、母たる任務あり。母の心身は其の生子に遺傳し、母の品性は其の兒童を感化す。世間、何人か母の懷に抱かれざるものあらん。これを育成し、これを陶冶せんことは、一に母たる女性の責に屬す。内訓に子女教育の道を說いて曰く、

これを教ふる者は、導くに德義を以てし、養ふに廉遜を以てし、率ゐるに勤儉を以てし、本づくに慈愛を以てし、臨むに嚴格を以てして、其の身を立て、其の德を成す。慈愛も姑息に至らず、嚴格も恩を傷ふに至らず。恩を傷へば則ち離れ、姑息なれば則ち縱にして教行はれず。詩に曰く、「則ち色し、載ち笑ひ、怒るにあらず、これ教ふ。」と。

子女の目に映ずるものは其の父母なり。而して、その最も近接するは母なり。されば、母は實に自ら正しうして他に及ぼさゞるべからず。婦德の闕如は啻に家庭に禍するのみならず、實に社會を蠹毒するものなり。家庭の王國に主たる女性の責も亦大なるか。（加藤咄堂著女性觀に據る）

二　をさな兒

小林一茶

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節しげきうき世に生れたる娘、ものにさとかれとて名をさととよぶ。ことし誕生日

*通稱彌太郎、信濃の俳人、文政十年歿す。

祝ふころほひになり、手うち〳〵、あはゝ、天窓てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、おなじき子どもの風車といふものもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるに、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それもたゞちに倦みて、障子のうす紙をめり〳〵むしるに、よくしたゝ〳〵とほむれば、誠と思ひ、けら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、なか〳〵に心の皺を伸しぬ。

又、人の來りて「わん〳〵はどこに。」といへば、犬に指さし、「かあかあは。」と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで、愛敬こぼれてあいらしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆる。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、たゞちに物投げすてゝ、片ゐざりにゐざり出でゝ、聲を上げ手眞似してうれしげなるをみるにつけ、いつしかかれをも振分髪のたけになして、をどらせたらんには、二十五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我が身につもる老を忘れて（うき）をなんはらしける。

かく日すがらをじかの角のつかの間も手足をうごかさずといふことなくて遊びつかるればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけ

て、やがて閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手かしこくもいだき起して、乳房あてがへば、ずは〳〵と吸ひながら、胸板のあたりをうちたゝきて、にこ〳〵笑ひ顏をつくるに、母は長き胎内のくるしみも日々の襁褓の穢はしきも打忘れて、手のうちの玉となでさすりて、一人よろこぶなりけり。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな。（一茶全集）

二　親族

添田壽一*

*法學博士

親族ニ關シテ二種ノ主義アリ。一ハ家長・又ハ戶主トイフモノヲ置キ、コレヲシテ一家ノ代表者、家族ノ統御者タラシムルモノニシテ、コレヲ家族主義ト稱ス。一ハ家族ガ各個ニ同一ノ權能ヲ有スルモノニシテ、コレヲ個人主義トイフヲ得ベシ。此ノ兩主義ノ利害ハ容易ニ判定スベカラズト雖モ、家族主義ハ一家ノ維持統一ニ便ニシテ、個人主義ハ各人ノ發達ニ必要ナリ。故ニ、此ノ兩者ヲ併用セバ、以テ害ヲ避ケ利ヲ完クスルコトヲ得ベキナリ。我ガ民法ノ採用セル所モ亦茲ニ在リ。

民法上ニ謂ハユル家族ハ、自ラ一定ノ限度アリ。卽チ、戶主ノ親族ニシテ其ノ家ニ在ルモノ・及ビ其ノ配偶者ニ限リテ、コレヲ家族トイフナリ。而シテ、又、謂ハユル親族トハ、血族・姻族・及ビ、配偶者ニシテ、家ニ在ルト否トヲ問ハズ、左ノ範圍

ニ屬スルモノヲイフナリ。

一、六親等內ノ血族。

二、配偶者。

三、三親等內ノ姻族。

血族中、父母・祖父母・子孫ノ如キハ直系ニ屬シ、兄弟・伯叔父母等ハ傍系ニ屬ス。姻族トハ結婚ニ由リテ生ズルモノニシテ、夫ト妻ノ血族ト、若シクハ、妻ト夫ノ血族トハ、共ニ姻族タリ。

親等ハ自身・又ハ、妻ヲ起點トシ、世數ヲ算シテコレヲ定ムト雖モ、傍系ニ在リテハ、其ノ一人・又ハ、其ノ配偶者ヨリ同始祖ニ遡リ、其ノ始祖ヨリ他ノ一人ニ下ルマデノ世數ニ依ル。

養子ト養親・及ビ、其ノ血族トノ間ニ於テハ、養子緣組ノ日ヨリ、血族間ニ於ケルト同一ノ親族關係ヲ生ジ、繼父母ト繼子ト、又、嫡母ト庶子トノ間ニ於テハ、親子間ニ於ケル同一ノ親族關係ヲ生ズ。然レドモ、コレラハ姻族關係ト共ニ離婚・又ハ、離緣ニ由リテ消滅スルコトアルヲ免レズ。

家族タルモノハ戶主ノ意ニ反シテ居所ヲ定ムルヲ得ザルノミナラズ、婚姻・又ハ、養子緣組ヲ爲スニハ、戶主ノ同意ヲ得ザルベカラズ。是、戶主權ヲ認定スル自然ノ結果ナリ。コレト同時ニ、戶主ハ家族ヲ扶養敎育スベキ義務ヲ負フ。然レドモ、家族ガ得タル財產ヲ家族自己ノ名ニ於テ特有スルコトヲ許シタルガ如キハ、個人主義ヲモ認定セル結果ナリ。

而シテ、戸主權ハ、死亡・又ハ、隱居ノ外、コレヲ失フコトナシ。彼ノ隱居ノ制タル、動モスレバ債權者ノ利害ニ關係シ、其ノ甚ダシキニ至リテハ、個人ノ發達・及ビ、一國ノ富强ト相容レザルコトアルヲ以テ、戸主ガ疾病・其ノ他、已ムヲ得ザル事由アリテ裁判所ノ許可ヲ得タル場合ノ外ハ、戸主ノ年齡滿六十年以上ニシテ、完全ナル能力ヲ有スル家督相續人ガ相續ノ單純承認ヲ爲スニ非ザレバ、隱居ハ濫リニ許可セラレザルナリ。

凡ソ、婚姻ハ各人ニ取リテ無二ノ大事ナルノミナラズ、生涯ノ苦樂、子孫ノ盛衰、一家ノ隆替モ、コレニ由リテ分岐シ、其ノ宜シキヲ得ルト否トハ公私ノ利益ニ重大ノ關係アリ。就中、早婚ノ弊ハ大ニ恐ルベキモノアリ。故ニ、男ハ滿十七年、女ハ滿十五年ニ至ラザレバ、婚姻ヲ爲スヲ得ザラシメ、且、父母・又ハ、後見人ノ同意ニ加フルニ、結婚セントスル男女ノ雙方ノ任意ノ承諾ヲ要スルコトヽセリ。

婚姻既ニ成立スルトキハ、妻ハ夫ノ家ニ入リ、入夫・及ビ、壻養子ハ妻ノ家ニ入リ、妻ハ夫ト同居シ、夫婦互ニ扶養スベキ義務ヲ負フ。是、婚姻ノ主眼ハ一家ヲ經營シ苦樂ヲ俱ニスルニ在ルヨリ、生ズル自然ノ結果ナリ。

婚姻屆出前ニ、夫婦ハ其ノ所有財產ニ就キテ別段ノ契約ヲ爲スコトヲ得レドモ、契約ナキトキハ、夫ハ妻ノ財產ヲ管理スルヲ原則トシ、日常ノ家事ニ就キテハ、妻ヲバ夫ノ代理人

ト看做スモノトス。コレラハ全ク一家經營上ノ必要ニ基ヅケルモノナリ。

婚姻ハ永久ノ契合ニシテ、夫婦ノ關係ハ殆ド神聖ナリ。故ニ、苟モ一度夫婦トナレル以上ハ、配偶者ノ死亡セル場合ノ外、濫リニ此ノ關係ヲ切斷スベキニ非ズ。但シ、萬止ムヲ得ザル場合ニ限リ、夫婦ノ協議ヲ以テ離婚ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。サレド、事ノコヽニ至ルハ不幸ノ最モ甚ダシキモノナルガ故ニ、尙耐忍ヲ主トシ、忠告・讓步・又ハ、其ノ他ノ手段ニ由リ、百方和合ノ方策ヲ講ズベキナリ。

本邦ニ於ケル離婚ノ件數ハ殆ド婚姻ノ五分ノ一ニ當リ、他邦ニ比シテ其ノ數ノ著シク夥多ナルハ、結婚前ノ注意ノ足ラザルト婚姻ヲ重ンゼザルトニ由ル。コノ弊ハ斷然一掃シ去ラザルベカラズ。

子ノ出生ニ由リテ親子ノ關係ヲ生ズ。蓋シ、父母ハ力ヲ其ノ子ノ育成ニ致シ、コレヲシテ完全ナル人トナラシメ、他日獨立ノ生計ヲ爲スニ足ルベキ素養ヲ與フベキ義務アルガ故ニ、又、子ヲ監護・教育・懲戒シ、且、其ノ財産ヲ監理スル權ヲ有ス。此ノ權ヲ稱シテ親權ト云フ。子ハ其ノ家ニ在ル父ノ親權ニ服セザルベカラズ。若シ、ソノ父コレヲ行フ能ハザルトキハ、母ノ親權ニ從ハザルベカラズ。但シ、子既ニ成年ニ達シテ、獨立ノ生計ヲ立ツル場合ニハ、例外ナリ。又、未成年ノ子ハ、其ノ居所ヲ定ムルニ、父母ノ指定ヲ受ケ、兵役ヲ出

願シ職業ヲ營ムニ、父母ノ許可ヲ受クルヲ要ス。是、皆、子ヲシテ不測ノ危害ニ陷ラザラシメンガ爲ナルノミナラズ、父母ヲシテ安ンジテ其ノ義務ヲ盡サシメンガ爲ノ規定ナリ。

（法制教科書）

一三　沖つ遠山

解説　沖

賀茂真淵

もろこしの人にみせばや、こよしの
吉野のやまのやまざくら花。

小澤蘆庵

おほろかに、月と花とのおぼろかに
ひとり寢まねば明けおとつなる。

加藤千蔭

みづからさす紫房くまぐまに寫ちりて、
月おもしろき秋すにもあるかな。

惜めども人には花のつれなくて、風のこころになどまかすらん。

村田春海

さしいづるこの日の本のひかりより、高麗もろこしも春をしるらん。

本居宣長

大井川かへらぬ水にかげ見えて、ことしもさける山桜の花。

香川景樹

（一）吉野朝時代の軍記
（二）延元元年五月
（三）後醍醐天皇

一四　櫻井の宿

太平記（一）

尊氏・直義、大勢を率して上洛（二）せんとする間、要害の地に於て防ぎ戰はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞早馬をまゐらせて内裏に奏聞ありければ、主上（三）大に御さわぎありて、楠木判官正成を召されて「いそぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力をあはせて合戰をいたすべし。」と仰せられければ、正成かしこまつて奏しけるは、「尊氏すでに筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、さだめて勢は雲霞のごとくにぞ候らん。味方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に駈けあひて、世の常の如くに合戰を致し候はゞ、味方決定打負け候ひぬと覺

え候なれば、義貞をも唯京都へ召され候うて、前の如く山門へ臨幸なり候べし。正成も河内へ罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵糧を疲らかし候ほどならば、敵は次第に疲れて落下り、味方は日々に隨つて馳集り候べし。その時に當つて、義貞は山門よりおし寄せ、正成は搦手にて攻上り候はゞ、朝敵を一戰に滅すことありぬと覺え候。義貞も定めてこの料簡に候はんが、路次にて一軍もせざらんは無下にいふがひなく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫にさゝへられたりと覺え候。合戰はとてもかくても終の勝こそ肝要にて候へ。能く〳〵遠慮を運らされて、公議を定めらるべきにて候。」と申しけり。

藤原清忠

「誠に軍旅の事は兵に讓られよ。」と諸卿僉議ありけるに、坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所もその謂れありといへども、征伐の爲に差下されたる節度使が未だ戰を爲さゞる前に、帝都を捨てゝ一年の内に二度まで山門へ臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ所なり。たとひ、尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ、戰の始より敵軍敗北の時に至るまで、味方小勢なりといへども、毎度、大敵を攻靡けずといふ事なし。これ全く武略のすぐれたる所には非ず、唯聖運の天に叶へる故なり。然れば、唯戰を帝都の外に決して、敵を鈇鉞の下に滅さんこと、何の子細かあるべ

き。」と申されければ、主上げにもと思召し、重ねて正成罷り下るべき由を仰せ出されけり。正成、この上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

櫻井驛址

正成是を最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿より河内へ還し遣すとて、庭訓を遺しけるは、「獅子子を生みて三日を經たる

*攝津國三島郡島本村

時、數千丈の石壁より之を投ぐ。その子獅子の機分あれば、敎へざるに、中より跳ねかへりて死する事を得ずと云へり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、わが敎誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見ん事、是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず尊氏の代に成りぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く〳〵申し含めて、各東西へ別れにけ

(一)支那春秋時代の人、射を善くす。

(二)漢の高祖の臣、高祖に代りて滎陽に死せり。

り。

一五　母の教訓

太平記

湊川にて討たれし楠木判官が首をば六條河原に懸けられけり。その後、尊氏楠木が首を取寄せて、「朝家に久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子ども今一度空しきかたちをもさこそ見たく思ふらめ。」とて、遺跡へ送り遣されけり。

楠木が後室・子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様々申しおきし事ども多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別なりとは、かねてより思ひ設けたる事なれども、形を見ればそれながら、目塞がり色變じて變りはてたる首を見るに、悲の心胸に滿ちて、歎の涙せきあへず。

今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎のせん方もなげなる様を見て、流るゝ涙を袖に抑へて持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、すなはち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を右の手に拔きもちて、袴の腰おし下げて、自害をせんとぞし居たりける。

母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取りつきて、涙を流して申しけるは、『栴檀は二葉より芳し。』といへり。汝をさなくとも、

父が子なれば、これ程の理に迷ふべしや。幼心にもよくよく事の様を思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より還し留めし事は、全く後を弔はれん爲にあらず。腹を切れとて殘し置きしにも非ず。『我たとひ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に殘りたらん一族・若黨どもを扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立てまゐらせよ。』と言ひおきしところなり。其の遺言つぶさに聞いて我にも語りし者が、いつの程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用にあひまゐらせんことあるべしとも覺えず。」と泣く〳〵諫め留めて、拔きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。

其の後よりは、正行、父の遺言、母の教訓、心に染み、肝に銘じつつ、或時は、童どもを打倒し、首を取る眞似をして、「これは朝敵の首を取るなり。」といひ、或時は、竹馬に鞭を當てゝ、「これは尊氏を追つかくるなり。」などいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、たゞ此の事をのみ業とせる心の中こそおそろしけれ。

一六　四條畷

中村秋香

秋篠や外山おろしの末氷る

正月五日の朝まだき、

(一) 河内國北河内郡四條村に在り。大坂市の東北四里。
(二) 國學者、御歌所寄人、明治四十二年歿す。
(三) 正平三年

飯盛(一)・尾崎(二)の野に山に
みち溢れたる稻麻の兵、
陽には備へて鳥翼を張り、
陰には潛みて魚鱗を疊み、
寄手おそしと待ちかけぬ。

春の日數もまだ淺みどり、
立ちもかくさぬ霞を分けて、
先陣・後陣のふた手に分れ、
必死をきはめし三千騎、
潮を捲きておしよする

(一)四條村の東に聳ゆる山。
(二)飯盛山の麓の野。

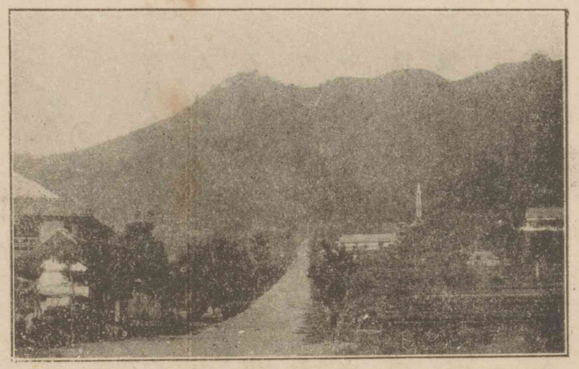
白旗一揆を一まくり
嵐の花とかけちらし、
雲霞の如き敵軍めがけて、
たゞちにすゝむ菊水の旗。

旌旗東西に入りまじり、
汗馬南北に馳せちがひ、
追ひつ、かへしつ、開きつ、卷きつ、
彼方は變じて蟠龍を結べば、
此方は化して逸虎とわかれ、
鎬をけづる三十餘合。

過去帳連署の三百餘騎、
電光・石火と薙ぎたつる
獅子奮迅の太刀風に
爭ひかねし北あらし、
一陣破れ、二陣潰え、
三陣・四陣もまた頽れ、
大浪かへして、亂れちる。

めざすかたきに近づきぬ、
すは、年來の本懷も、

今こそ遂げめと、見るが中に、
あはれ、こはそも何なれや、



四條畷神社を望む

花とまがひて散りかゝる
梢の雪のたゆたひに、
望も絶ゆる道しばの
露とはかなく消えにけり。

春風ぬるき四條畷、
むかしを問へば、秋篠や
外山の峰は霞めども、
やしろの梅はかをれども。

（不盡廼舍遺稿）

◎親心

坪*内雄藏

*早稲田大學名譽教授、文學博士。

神戸から北海道函館へ向けて出帆した汽船某丸が志摩の沖合を走つてゐる頃、甲板に集つた上中下の乘客の中で目に立つたのは年頃四十一二の婦人。身分ある人の妻女らしく、甲板に出て居る間も、老女と小間使とが側を離れぬ。金の指輪が二つも三つも左右の手の指に光つてゐるといふので、その身なりの立派さが推察される。それと照りあはせて一しほ見すぼらしく見えたのは、七つ位を頭に子供を三人までつれた四十前後の男。子供らは三人とも醜からぬ顔だちであるが、身なりは甚だ粗末であつた。

婦人は、何か思はくがありげに、親子の者の樣子をながめてゐたが、何事か老女にさゝやいた。いつとなく、老女は親子のそばへ來た。末の子がわんぱくを言ふのをすかして、老女が菓子をくれたのが緣となつて、互に口をきゝ始めた。

お子供衆が澤山で、お樂みでござりませう。

と老女がいへば、

どう致しまして。此處に居ります外に、まだ乳呑兒がひとり。「貧乏人の子澤山。」とやら子供故に苦しみます。さりとて、捨てるにも捨てられませぬゆゑ、飢死せぬ用心にと、親子夫婦六人づれで根室へ出稼に參ります。

といふ。老女は聲をひそめ、

ちと立入つた事でござりますが、今のお話が眞實なら、承つて見たいことがござりますが。

と言ひかけて、ためらへば、

それは、また、どのやうなこと。

と問返され、老女は改めて語り出した。

わたしの主人と申すのは函館の豪商で、或大きな會社の社長をしてをる人で、夫婦とも萬づに不自由のない身でござりますが、四十を越しても子が無いのが玉に瑕。「男の子なり、女の子なり、親知らずでくれる人

はないか。」と年來探してゐるところでございます。どうか、お前樣のお子供衆の中のひとりを、親知らずで主人方へ下さりますまいか。行末はそのお子が主人方の跡取、御禮としては、金子百圓あげまする筈、何と御承諾下さりますまいか。

といふ。

思ひがけぬ結構な話に、男は大に悅び、すぐにも承諾しようかと思つたが、妻と相談致しました上で、兎も角も御返事を致しませう。

とて、その時は別れた。

その日の夕方、汽船が相模灘を通つてゐる頃、かの男は妻らしい女と一緒に長男をつれて上等室を訪れて、

どうぞこの小僧をお引取り下さりませ。

と言入れた。社長の妻女は大悅でその子を受取り、早速老女にいひつけて、用意の着物を着せるやら、湯を遣はせるやら大騷であつた。

貧乏人夫婦は百圓といふ大金を貰ひ、飛立つやうに悅んだものゝ、又、是が親子一生の別かと思ふと悲しくて、暫くはそこを立ちかねてゐた。

翌日、船が房總半島を回つてゐる頃、昨日の男は五歲になる次男をつれて再び社長の妻女を訪れた。さて、きまりわるげに言出すやう、

昨晩改めて考へましたところ、長男を餘所へあげて弟を殘しますのは、何分にも順が違ひますゆゑ、どうも長男はあげられませぬ。成らうことなら、次男とお取換へ下さりますやう。

と、恐る〳〵言出した。社長の妻女は快く承諾して、長男を次男と引換へた。

すると、その日の暮れ方、今度は母親が三つになる女の子をつれて訪れた

何とも申しかねましたが、差上げました次男は、目鼻立から聲までが亡くなつた姑に生きうつし。それゆゑ、現在の姑を棄てるやうな氣が致しまして、どう考へても、心が濟みませぬ。結局、辨へがあるだけに、大きい程ふびんがまさります。誠に申しかねましたが、このぐわんぜなしとお取換へ下さりませぬか。

と淀み〳〵言入れた。社長の妻女は親心を思ひやつて、これをも快く承諾した。

翌日の午前、船が函館灣に近づいたころ、今度は夫婦づれでしを〳〵と上等室へはひつて來た。社長の妻女を見るや否や、跪いて、物をも言はずに泣いてゐる。子細を尋ねても、只

面目がございませぬ。

といふばかりで、泣いてゐる。幾たびも問はれて、やう〳〵顏をあげ、

このやうな自儘なことはもはや申される筈ではございませんが、

と前置をして、夫婦かはる〴〵語つた。

昨日、次男をいたゞいて歸つてからは、夫婦互に約束して、もう〳〵決して未練はいふまいときめましたが、夜一夜、小さいのゝ事が氣にかゝつて、ぽつちりとも寢ませんでした。あのやうなぐわんぜないものを、金子にかへて人樣へあげるとは、われながらむごい心と思ひました。いただいたお金はお返し申します。どうぞ娘をばお戻しなされて下さりませ。こんな思をするよりは親子六人揃つて飢死した方がましでございます。粗忽をお免しなされて、どうぞ娘をばお戻しなされて下さりませ。

と、夫婦かはる〴〵涙ながらに賴んだ。

これを聞いて社長の妻女はつく〴〵感じ入つた。他人から見ればこそ自儘勝手とも思はれるが、子を思ふ親心はげにかうもあらうと、思ひやりの深い婦人ゆゑ、快く承諾して、かの女の子を返し、その上、戻した金子は請取らず、親子が行末の暮しの助にといつて與へた。夫婦は夢かとばかり喜び、手を合せて社長の妻女を拜んだ。

この時、船は函館の港に着いた。資本が出來たゆゑ、夫婦は根室へ行くことを止め、函館に留ることとなり、やがて或會社へ雇はれた。それも社長の妻女の世話であつたといふことである。（國語讀本）

一七　一兵卒が戰場より妻に贈りたる書

復啓。決して吾が身を御案じ下さるまじく候。やがて御身及び愛兒レイモンに再會し得べき望もこれあるべしと

*名はジョルジェラン。佛人にて元料理人。今次の歐洲戰爭に於て佛國の戰線に立てるもの。

存じ候。何卒レイモン共々御身も御自愛專一に成されたく、若し御身にあれ、子供にあれ、病氣になられ候はゞ、なかなかに恨に思ひ申すべく候。

さて、祖國の爲に一度劍を執つて戰に出で候上は、一死以て身を祖國に奉ずるは素より覺悟致居候へば、たとひ吾が身に如何なる事あり候とも、其の場に至りて取亂し、不覺を取らるゝ樣のことなきやう賴み入り候。たとひ小生は戰死致し候とも、萬事を御身に依賴して安心致し、些の心殘もなかるべく候。何卒吾が子を敎養し、一人前の立派なる男子に仕立て、御身の力の限り相當の敎育を受けさせられたく候。吾が子成人致し候上は、父は祖國の爲、汝等子孫の爲に

此の戰場に死したる旨、よく〳〵申聞けられたく候。斯く申し候も、たゞ後々の爲を存じ候てに候。他日御身と共に、吾が子の養育を樂しむべく候。さはさりながら、前申候如く、運命は豫め料るべからず、殊に今日の場合、今夕の命も知るべからず候間、吾等は萬事を顧慮せず、只鋭劍を執つて突進し、敵を破るのみに御座候。（中略）

最後に今一度繰返して申し候。小生は只御身を信じ、御身の雄々しき心に賴り候。是以上申し入るゝは却つて御身を煩はすのみと存じ候間、今は最早何も申さず候。さらば。偏に御身と吾が子レイモンとの幸福を祈り候。早々。

（時局に關する敎育資料）

一八　熊王の發心

吉野拾遺

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりけるとき、左馬頭正儀に度々はかられけるを、口をしく思ひこめてすごしたりけるに、いにし住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我が爲にも親の敵にて候へば、いかにもしてうち侍らん。河内へこえて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ心をゆるすことのあらずとも、七とせ八とせ程も仕へ候はゞ、そのうちには討ちぬべきたよりのいかでなからん。

(一) 南北朝時代の隱士松翁の作。
(二) 楠正儀
(三) 攝津國東成郡にあり。正平七年正儀賊將細川顯氏と此の地に戰ふ。

御暇をこそたまはらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれと思ひながら、「をさなければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は、命にかはりて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ。」と強ひてとゞめ給ひけれども、「少し大人しくなりなば、よも近づけ給はじ。をさなくありなんとき參りてこそ。」としきりに望みければ、力及び給はで、常に身をはなち給はざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、(一)阿部野まで人あまた添へて遣らせけるに、それよりは我にひとしき童一人を具して、(二)赤坂の城に行きて、そのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人におはすらん。」と尋ねければ、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひ

(一) 摂津國東成郡天王寺村
(二) 河内國南河内郡赤坂村

ける者の小子に、熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は、去にしとき、住吉の戰に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合せ候へば、せん方なくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひて、さまざま勞りて、後に、正儀に有りつる事を語りて、「をさなくは候へど、心のさかしくて。」など申すに、あはれがり給ひて、召寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思ひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五ほどになりければ、「河内の國にてすこしなる處をしらせん。」といひけれども、「いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七めぐりに當りけるに、思ひつけて、「こよひ正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん。」と思ひたちてありけるに、その日、御前に召して、「けふは吉日にてあるなれば、元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はりける鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。

夜に入るまで正儀の御前に在りけるが、また、ふと思ひ出でて、「討ち奉らんならば、今宵こそ。」と思ひて、膝を押直して、正儀

(一) 正平十三年
(二) 和田正武
(三) 後村上天皇

に目を懸くれば、年頃の情深かりし事、今日の元服の事など思ひ續けて、「いかで情なく討ち奉らん。」と思ひかへして、心を鎭むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。」と思ひさだめけれども、何心もなく渡らせ給ふ有樣を見ければ、御いたはしくて、堪へかねけるにや、廣緣に出でて、聲を揚げて泣叫ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひ給うて、障子開き見給へるに、伏沈めるさまの、たゞには見えずありければ、「いかに。」と問はせたまひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために、みづから死なんより外は候はず。」とて、刀を取りなほせば、ありつる人どもみな涙に暮れてありながら、「いかでさはあらん。」と取附きてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻押切り、往生院(一)にて形を替へ、君より賜はせたる名なればとて、正寛法師とぞいひける。

寺の傍に草の庵を結びて、「もしも心の變ることのありもやせん。」とて、往生院の門の外へは出でずして、行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有樣をくはしく書添へて、返しけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。

（吉野拾遺）

(一) 河内國中河内郡枚岡南村に在り。

一九　越後の海岸

尾崎紅葉(一)

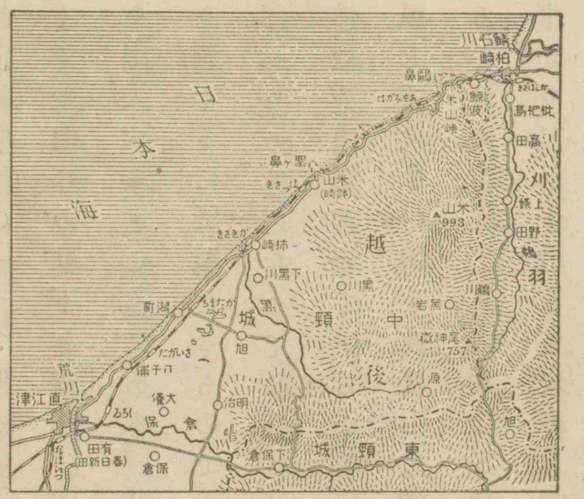
九時三十五分に(二)こゝを發車して、忽ち眼明かなりと驚けば、

(一) 名は德太郎、小說家、明治三十六年歿す。
(二) 明治三十年七月三日
(三) 越後國春日新田驛

渺々たる日本海は、をりしも波に一船を着けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虛しく濶きに、唯池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、瑠璃の煙るやうに物ありて、幽かに顯るゝのを、はやくも「佐渡々々。」と案内する聲がした。まことに香(一)嶽樓の緣端に伸びあがつて、「わが眉ふとし。」(二)と天の一方に望んだ佐渡が島は、いま目を遮る物もあらぬ三十海里の波の上にうかび出たのである。美なるかな、此の島の風情。凡そ、眺めて、かくも懷かしく、又、たとへん方無く心動かさるゝ遠景色は、之を他に求めて、己は、有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふのに、

佐渡へ〳〵と草木も靡く、

(一)越後國中頸城郡赤倉溫泉にあり。
(二)涼風のわが眉太し、佐渡が島。



佐渡は居よいか、住みよいか。

とあるのを見ても、此の景に對して心を動かさゞる者は無いと知れる。殊に「居よいか、住みよいか。」と疑つた處に言はれぬ妙がある。思ふに、此の唄の精神も唯其の九字に存し、又、此の景に人の恍惚たるのも、全く其の感に堪へぬ爲であらう。

抑此の海の雄渾に併せて此の島の秀麗を見るのは、北越

鐵道線雙快の一つで、他は、更に進んで鉢崎から柏崎に抵るまで、米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつゝ、八門のトンネルを出入するところにある。其の趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるものであるが、それは皮相の似てゐるばかりで、彼に在つては全く此の氣魄を闕く。

道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆ると云ふ有樣。其の大なる者に在つては、百歩にして崖と壅がり、二百歩にして岩鼻と突出るのを、總べてトンネルに貫いて、「佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し」、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

*駿河……興津町の東にあり。

トンネル續きの線路は、確氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬは無いが、別してこゝに其の想が有るのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直ちに乙のトンネルの全景が見え、乙を過ぐれば丙、丙を去れば丁と、彼等の爭つて五月蠅なすのが一々目に入る。譬へば、己大剛の者にして群る敵を物の數ともせず、當るを幸ひ、一太刀づつ片端から撫斬にして通るもかくやと覺ゆる樣で、而も、處は弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪鎧鞨と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたりと思へば、殆ど快極つて、肉躍るのであつた。こゝを過ぐれ

ば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか〳〵神經などを衰弱させて居る段ではなかつた。（煙霞療養）

二〇　山路の物語

堀[一]秀成

布教のために函館の港にまかるべき仰言蒙りてこゝにありける程、福[二]山なる開拓使の廳より、「またこゝにも。」といひおこせければ、馬に鞍おきて函館の宿を出でたつ。年は明治の六年、時は七月の二日といふ日なりけり。かくて、山を越え、川を渡り、磯べを傳ひなどして行くに、尻内の郷といふ處より福山の郷までの間に七里の山越あり。その山中には

(一) 國學者、神道布教家、明治二十一年歿す。

(二) 後志國松前郡福山町

只一二軒の家ある由聞きぬ。げに、木立は暗く、山は深く、艱ましき路ながら、駒に任せて登りゆく。

かくて、三里ばかりも來ぬらんと覺ゆるに、聞きしが如く草の家二軒あり。右の方なるは、家居のさまいと古く、もとよりこゝに住めりと見ゆ。左なるは、近き頃住みつきたりと覺えて、おろそかながらにもの新しう見ゆ。火を乞ひて煙草ものせんと、馬よりおりて、家に入れば、いそぢあまりなる嫗と二十ばかりなる女と二人ありて、主人とおぼしきは見えず。さて、おのれを見て、かの嫗いともうや〳〵しく塵打掃ひ、上座にむしろ敷きて、もてなしたり。かくて、下についゐて、「これにやすらひ給へ。かゝる深山の奥の伏屋なれば、

さこそ物むづかしう思召すらめ。」などいひて、かひ〳〵しう火桶の灰かきてもて出でぬ　二十ばかりなるもこの嫗のうしろにつきて、いとはづかしげに額づきぬ。

この家すべての様たゞならず。家内の者も深山人とも覺えず。いかなる者ならんといぶかしさに、彼方こなた見めぐらせば、金紋まきたる鞍に麻繩つけて薪木負はする馬のになしたるさまなり。また、鎧一つ壁にものして、つゞれ衣打掛けたり。かの謠曲といふものに見えたる佐野の某が隱れがの心地して、ゆかしう覺えつゝ、まづ、腰より煙草取出でてくゆらすに、嫗のはたちばかりの女に、「きこしめすべくもあらねど、茶まゐらせよ。」といふを、その女手をつきて、「かし

(一)鉢の木
(二)佐野常世

こまりぬ。」と禮儀正しく、黑うなり果てたる釜の内より、宇治山の木の芽の汁もその釜の色に似たるを汲出でて、物にすゑて持てきぬ。

すべて、この女、嫗のもの仰するごとに必ず手をつき頭をたれて承るさま、主從と覺えたり。かくある人に從者あらんもいぶかしく、さてなんいよゝ昔ゆかしき心地して、おのれ嫗に向ひて、「おのれらは公事ありて福山の方へまかる者なり。いと無禮なれど、見まゐらするに、世に後れ給ひてかくおはしますならん。抑何處いかなる人におはしますらん。かく申すおのれも、今は公に仕へて人がましき身にこそあれ、一度はいともうちわびて田舍住ひせしこともあれば、思

ひやりまゐらせて心苦しうおぼえ侍るを。」といふを聞きて、嫗「たゞ煙草の火をとて、かういぶせき伏屋のうち訪はせ給ふだに忝うはづかしう侍るを、身のよすがなき事さへ思ひやりて問はせたまふは、宿世あやしう侍り。今は何をかつつみ侍らん。さきには世々松前氏に仕へて、その家人の長にもありけるを、近きころ、君に放たれ夫に別れ、たゞ一人いまだ二十にも足らぬ世嗣がねのわごのみ殘りて、かうやつやつしうなりはて侍りぬ。わごも家にあらば、君たちの立寄らせたまふを、さこそ本意あることに思ひ給ふらめ。さきに山かせぎにとて出でたち侍り。かゝりければ、中々に深山の奥こそと思ひ入りて、この山本なる民どものなさけにて與へられたるこの小屋一つを露のよすがに住みつき侍り。さるにても、頼みなき身に侍るものから、これなる下女は津輕のうまれにて民子と申す者にて侍るが、十四の年より召しつかひて、今年はたちになり侍り。見給ふ如く折りたく柴の煙にはすゝけ侍れど、みめかたち卑しうもあらず。さるが上に、わらは親子の仰することいさゝかも違ふることなく、心を盡して仕へ侍るからに、かゝる身になりし時、暇とらせんとて、世を去りし夫が物の底にいさゝか殘し置きたりし金のうち三枚ばかりに衣添へて取らせ侍るを、この女うちなきて、「こは何事をかのたまふらん。十四のとしの春より身に蒙りたる御惠は山より高うはべるものを、

今かくなり給ふを見捨てまつりては何處にかまかるべき。昔のまゝにおはしまして、御心にかなはぬ事しもあらば、暇をもたまはり、又、さなくとも、年重ねたらん後は、親の許にもまかりなんを、かう御心細うおはしますをなどかうち置き奉らん。山の奥・野の末までも召具したまへ。薪木こり、馬追ひても、御手だすけをばなし侍らん。』とて、うけひきはべらず。わらはもうち泣きて、『その志は忘るゝ世もなきまで嬉しかれども、いま花にひとしき身を〔深山木〕の色なきものとなしはてんは、いと惜しきわざならずや。とにもかくにも、親のもとにこそ。』と申し勸め侍りしを、この女うち萎れて、『かくまで申しても許したまはずば、この深谷の底に身を投げんよりせん方はべらず。花の色香も、主の君の春にあひ給ふ時こそ、世にも匂はせまほしけれ。かくなりはて給ひし上は、白髪の生ふるまで、この深山の奥の埋木となり侍らんを。』とて、思ひ定めて見え侍れば、今はとて、今日までかくてさしおき侍り。われら親子のはかなさよりも、この女の上を哀とだに見たまへ。』と語り出でて、涙止めあへず。

おのれもおぼえず旅の衣の袖しぼりつゝ、『いともあはれに、いともめでたきこと、承るものかな。かう世に稀なる人の上、ひろく人にも聞かせ、世の女のよき手本にこそなすべけれ。必ずその志失ひ給ふな。かゝる人を、いかでか、神の守り給はぬ事あらん。神の惠に花咲きにほはん春も必ずあ

るべきを、身にしむらん朝夕の山風、いとひ給へ。」と慰めて、馬引寄せ、うち乘りけるを、老いたる、若き、二人ながら送りいでて、袖をなん分ちぬる。布敎のためにとて旅路をたどるこの身には、黃金にも玉にもまさる、これの山路の物語なりけり。（山路物語）

二　雨の夜

樋*口一葉

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上、やがて五尺もこえつべし。今歲はいかなればかくいつまでも丈のひくきなど言ひたりしを、夏の末つかた、極めて暑かりしに、唯一日、ふつか、三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。秋

*名は夏子、小說家。明治二十九年歿す。

かぜ少しそよ〳〵とすれば、端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音なひこそは哀なれ。細かき雨ははら〳〵と音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず。風一しきり、颯と降りくるは、彼の葉にばかり懸るかと、いたまし。雨は何時もあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。更けゆくまゝに、燈火のかげなどうら淋しく、寢られぬ夜なれば、臥床に入らんも詮なしとて、小切れ入れたる疊紙取出し、何とはなしに針をも取られぬ。未だ幼くて、伯母なる人に縫物ならひつる頃、袵先・褄の形などむづかしう言はれし、いとはづかしうて、是習ひ得ざらんほどはと、家に近き某の社に日參といふことをぞ

しける。思へば、それも昔なりけり。教へし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方もの忘れしつゝ、斯くたまさかに取出づるにも、指の先こはきやうにて、はかゞしうはえも縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なく淺ましと思ふらんなど、打返し、其の昔戀しうて、そゞろに袖もぬれそふ心地す。遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打つけの騷がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の痩せたる肩揉むとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいとゞ心細さのやるかたなし。（一葉全集）

樋口一葉

二二　讀書の選擇

佐々政一[一]

エマソン[二]いはく、「書を讀まば、最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の渉獵に記憶力を徒費することなかれ。」と。かの新聞・雜誌と拙劣なる小説とのみを愛讀するものは、エマソンのいはゆる劣等なる群書に記憶力を徒費するものなり。否、彼等にして、かゝる劣等なる書籍の耽讀に歳月を費して、毫も良好なる書籍に趣味を覓むることなくば、そは、啻に時間と記憶力とを徒費するのみにあらず、實に注意力と集注力とを薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の

（一）東京高等師範學校教授、文學博士、國文家。大正六年十一月歿す。
（二）亞米利加の哲學者

煥發を妨げ、人をして、神餒ゑ氣阻みて、頽然として生氣なきに至らしむべきなり。

これを覺醒せんとするには、いかにすべき。エマソンまた教へていはく、「讀書の最良法は、かの時間と紙とによりて製作せられたるものを措いて、直ちに天然を讀むにあり。」と。然り。誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫く新聞・雜誌と小說とを棄てて、名山・大川の間に、直ちに秀麗なる天然の文學に接せよ、親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾くは、汝が趣味を覺醒せしむることを得ん。

偉大なる文學は、偉大なる天然に近し。天然の爲すところは、天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇・大作に親炙するは、恰も名山・大川の間に逍遙するに似たり。善良なる讀書は、よく眠れる趣味識を警醒し、よくこれを啓發し、助成し、清新なる思想・斬新なる筆力を涵養するものなれば、予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を敎ふるにありと信ずるなり。

苟も書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを擇ぶべきこと勿論なり。されども、最も優等なる書・卽ち、第一流の書は、天下そも〳〵幾何かある。今單に日本の文學書についていはば、萬葉の一部と源語と近松の作と、その他、なほ强ひて二三を數ふるを得れども、一國の文學界の讀書をこの僅少なる書册に限らんことは、殆どなし得べきにあらじ。否、

此の如きは、實に、予等が褊狹・固陋として忌むところなり。」

今、この褊狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に專なることを得んとせば、まさにいかにすべきか。かのエマソンは、實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示せり。

まづ、いはく、「一年を經ざる著作は、讀むことなかれ。」と。蓋し、一年を經て尙社會に忘れられざるものは、或は多少の趣味あるものならん。一年をだに經ずして反故として投棄せらるゝものは、恐らくは、一讀の價値なきものならん。歲月の淘汰を待たずして、徒らに爭うて新版物を讀まんは、徒勞と時間とを賭して、文學通の虛名を博し得るに止まらんのみ。

又、いはく、「有名ならぬものは、讀むことなかれ。」と。こは、徒らに所謂珍本に蟻集することなからんことを敎ふるなり。そも〳〵、名聲とは多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の鑑賞に反して、ある機會の爲に纔かに散佚を免れたる古書を殊更に熟讀せんは、寧ろこれ癖に類せずや。さる、如何はしき勞力を費さんよりは、まづ有名なるものを讀盡せ。予等の眼前には、半生を讀書に費すともなほ熟讀・玩味する能はざる、許多の有名なる著作あるにあらずや。

又、いはく、「嗜好に適せざるものは讀むことなかれ」と。極めて野卑なる嗜好の、人を誤ることは、いづれの方面においても、われらの知るところなれども、前述の二條件に適合した

る範圍において、その嗜好するところを求めば蓋し大過なきを得んか。ヒル(一)は更にこの條件を敷演していはく、「再度以上讀破することを欲せざる書は、讀むことなかれ。」と。試みに思へ。現時の讀書界に於て、よく再讀玩味せしむる新版物、そもいくばくかある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて沒趣味の中に投ぜんとす。歎ぜざるべけんや。故に思へらく、以上の三則は、讀書界の時弊を救ふべき最高手段なりと。（鶉衣評釋による）

(一) 米國ハーバード大學教授

(二) 東京帝國大學理科大學教授、理學博士、人類學者、大正二年露都に歿す。

◎ 牛乳縱覽　坪井正五郎(三)

○

或店のガラス戸に左の通り大書してあつた。

牛乳
官報
新聞
縱覽

世間には牛乳を見にいく人があると見える。

○

或田舍道で

しほせんべい御休所

と書いてある掛け行燈を見た。此の邊では、鹽煎餅が歩き廻つて、時々休息すると見える。

○

泉岳寺内義士遺物陳列所の貼札に斯う書いてある。

懷中御用心

懷中の二字を「すり」と讀むなどは、北海道の地名よりわかり惡い。四角な

字を讀む人は御用心、々々々。

○

或人歩きながら道連の人に

「君はオートモビールといふものの經驗があるか」

と聞くと、

「そんなビールは飲んだことがない」

といふ。

「イヤ、ビールぢやない。僕のいふのはオート、モビールのことさ」

といふと、

「アヽさうか。食つたことは度々ある。砂糖を澤山掛けると、なか〳〵美味いものだ。

これはオートミールの間違であらうが、世には家藏をも飲む人さへあるといふことだからオートモビールに砂糖を掛けて食ふぐらゐは珍しくないかも知れぬ。（牛のよだれ）

自働車のこと。

三三　風雅の嗜

徳富蘇峯*

名は猪一郎、國民新聞社長、貴族院議員。

たゞかりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より、かなたに聳ゆる山々のけしきを眺めたるのみにても、風雅の嗜ある人と、なき人とは、おのづからその興味を感ずる度を異にすべし。あゝ、この風雅の嗜こそ、何人にもあり得べくして、又、何人にもありたきものなれ。

世には風雅人とて、とかくに風雅といふことをばわが物とのみ思へるものあり。わが物となすは妨げずと雖も、これをわが專有物となさんとするに至りては、大に不可なり。

彼の、世を避け俗を脱して山林に幽居し、花鳥風月をのみ友とするもの、若しくは、詩歌・書畫・茶の湯・挿花・音樂等の技藝に

長じ、又は、それらの鑑識に長じたるものの如き、これらはもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも、風雅の全權を專有し得べきものにはあらず。否、風雅の嗜は何人にもあり得べきものなり。

凡そ、其の境遇の如何に關せず、その修養の淺深にかゝはらず、すべて、いかなる人といへども、その優美の心を以て宇宙と人とに接する時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而して、風雅の嗜は、恆にこの心を存して失ふことなからんことをつとむるによりて、生ず。されば、風雅は、必ずしも萬卷の書を讀破り、天地神人の祕密を究めたる學者にのみ存するにあらず、眼に一丁字なき田夫野人

百敷の大宮人はいとまあれや、櫻かざして今日も暮しつ。（新古今集）

といへども、田畝の間に立ちて、春霞のたなびくひまより芙蓉の峯の白き冠を露したるを見て、いひ難き快感をその腦裏に思ひ浮べたる刹那に於ては、乃ちまた風雅の人たるなり。風雅は、また、必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにあらず。彼の、心なき賤の草刈といへども、その背負へる草束の間に一朶の花を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ちまた風雅の人たるなり。たゞ、こに必要なるは、この心を恆に存して失はざらんことと、この心を練磨・修養して愈その眞醇に近からしむべきことと、是なり。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を名畫・珍器の裏に

置けども、遂に風雅の眞味を解すること能はざるものあり。風雅は、又、必ずしも技藝に存せず。世には詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音樂者と稱へられて、却てまことの俗物なるものあり。人若し風雅の嗜あらば、その境遇や、技藝や、もとよりこれを助くるに於て大なる力あるべしといへども、しかも、單にこれのみによりて風雅は卽ちこゝに在りと斷言すべきものにあらず。彼の生田(一)の森の激戰に、梅花を箙に挿みて、みづから標識したる梶原景季(二)を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。

風雅の嗜は人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを看、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己

(一)神戸市の東部にあり。一の谷合戰の時、平家方の東門なおきし處。
(二)景時の長子、源太と稱す。

を天地の懷裡に投じたる感あり。皎々たる明月は、何人といへども、自由にこれを眺むることを得るにあらずや。風雅は貴族的にもあり。しかも、最も多く平民的に存す。而して、われらはこの風雅の嗜を平民社會に普及せしむることの、世道人心を正す上に於て、最も必要なるを見る。

風雅の嗜あるものは、おのづから餘裕あり。何となれば、議會討論の場中に於ても、なほよく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解すればなり。風雅の嗜あるものは、おのづから氣品あり。何となれば、利害得失の外に、心目を快暢ならしむる別天地を有すればなり。風雅の嗜あるものは、いかなる場合にも、樂みあり。何となれば、現在の齷齪たる社會の

うちにありて、よく宇宙と人との美をわが心に吸收することを得ればなり。風雅の嗜あるものは、又、よくみづから容忍することを得。何となれば、その暗黑なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。蓮*月尼の歌にいはく、

宿かさぬ人のつらさをなさけにて、
　おぼろ月夜の花の下ぶし。

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。

世には、千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を抛ちて書畫を求めて、風雅こゝにありと誇るものあり。若しその人にして眞

*太田垣蓮月、京都の歌人。

に風雅を解し、且つ、力よくこれを致すに餘りあらば、我等は敢て之を斥けじ。然れども、その人にして徒らに器物の末に心を勞して、單にその多きを貪り、その奇を誇らんとならば、われらは之を指して玩物喪志の徒といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。之に反して、陋屋破窓のうち、新聞の挿畫を壁に挿み、今戸燒の茶碗にて澁茶を喫する人といへども、その心よくこゝに存せば、これ實に風雅を解せりといふべきなり。（日曜講壇）

二四　懈怠心

兼*好法師

或者、子を法師になして、學問して因果の理をも知り、說經な

*吉田兼好、室町時代の人。

どして世わたるたづきともせよといひければ、教のまゝに説經師にならんために、まづ馬に乘習ひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられんとき、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心うかるべしと思ひけり。次に、佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師のむげに能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業やう〳〵境に入りければ、いよ〳〵よくしたく覺えて、嗜みける程に、説經習ふべきひまなくて、年よりにけり。

此の法師のみにもあらず、世間の人なべて此の事あり。わかきほどは、諸事につけて身を立て、大なる道をも成じ、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども心には

かけながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事のみに紛れて月日を送れば、事々なす事なくして身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、とりかへさるゝ齢ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。

されば、一生のうちに、むねとあらまほしからん事の中に、孰れか優るとよく思ひくらべて、第一のことを案じ定めて、其の外は思ひすてゝ、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にもあまたの事の出できたらんなかに、少しも益のまさらん事を營みて、其の外をば打捨てゝ、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に取持ちては、一事も成るべからず。

人のあまたありける中にて、あるもの「ますほのすゝき・まそほのすゝきなどいふ事あり。」わたのべの聖このことを傳へ知りたり。」とかたりけるを、登蓮法師其の座にありけるが、聞いて、雨のふりけるに、「蓑笠やある。貸し給へ。」彼の薄のこと習ひに、渡邊の聖がり尋ねまからん。」といひけるを、「あまりにものさわがし。雨やみてこそ。」と人のいひければ、「むげの事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨のはれまを待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや。」とて、走り出で行きつゝ、習ひにけり、と申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたう覺ゆれ。

「敏きときは卽ち功あり。」とぞ論語といふ書にもあるなる。

この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をも思ふべかりけり。（徒然草）

二五　鵜戸窟

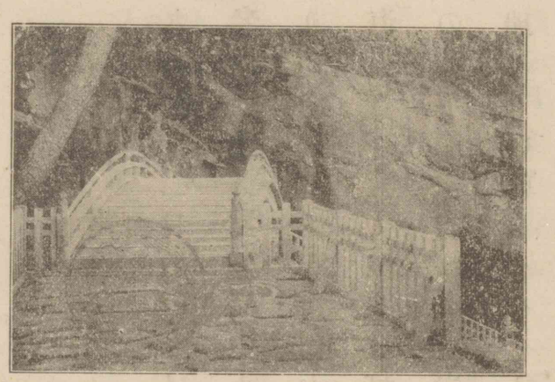
徳富健次郎[一]

九月二十二日の朝早く起き、宿の主婦が案内で鵜戸神宮[二]に參詣。潤葉常綠樹の小暗い山を刻んだ高い〳〵石段を上り切つて、石疊を鋪いただら〳〵下りの八丁阪を東へ下る。海の音が大太鼓など打つ樣に響いて來る。やがて、日向表の太平洋が現れる。崖にさし懸つた雄大な雄松の間から、瑞々しい朝日が今しも洋を離れて、一道の白金を洋の只中に爛し、脚下に出沒する巨岩にぶつつかつて、白金の煙を飛

（一）文學者
（二）大正二年
（三）日向國南那珂郡鵜戸村に在り。官幣大社。

ばせて居る。朝の日の匂、海の香、松の香の溢るゝ澎氣を吸うて、ぱつちりと目がさめて來る」。

東に下り切ると、玉垣に限られた白砂の平臺を北に向うて折れ、社務所を左手に見て、一の鳥居を入り、太鼓形の木の玉橋の際で、一同宿の下駄や草履を脱ぎ、跣足になる。冷りとした感覺が足裏からつと腦天に走つて、引締つた氣分になる。肅んで太鼓橋を渡り終ると、數十級の石段が、緩い勾配を以て、海の方へ、山根岩根の方へ導く。石段を下り切



鵜戸神宮玉橋

ると、窟の口。御手洗の水で雙手を淨め、二の鳥居を入つて、窟内本殿に進む。

南日向の陸から太平洋にさし出でた一座の岬、頂から一面簇々と松を被つた、其の根方が剝げて、岩の肌を露した處、何時の世からか刳られて、東西二十一間、南北十六間、高さ一丈八尺の窟が口を開いて居る。東向太平洋に正面して、ぱつくりと大蛤の口を開いた此の窟内に、檜皮葺丹朱塗の矮い愛らしい社殿が建て籠めてある。傳説に、此の窟は豐玉姫が鵜葺草葺不合尊を生み給うた產舍の跡だと云ふ。祭神は卽ち鵜葺草葺不合尊、創立は人皇第十代崇神天皇の昔といふことになつて居る。傳説は兎に角、一歩窟内に入る心

地は、取りも直さず、大自然の胎内に入る心地である。自然の胎内に入つた自然の子は言ひ難い嚴肅な感と潑剌とした欣喜とに滿ちて、自己と周圍とを見廻す。

鵜戸神宮窟内本殿

劫初にも斯く照つたか、大正二年秋九月の今しがた海から生れた朝日が斜に嫩かにさし込んで、窟内の砂は黄金を鋪き、矮い社殿は朱の色嚴かに照りはえて居る。押扁めたやうに殊の外床低く、よろづ小體に窟内に縮こまつた此の社殿を見て居ると、母胎に手足を縮めて頭を膝にくつつけた胎兒を見るかの樣に愛らしい。素足に冷たい砂を踏みつゝ、窟内を歩き廻る。隅々はほの闇く、巖壁から冷たい雫がぽたり〳〵と落ちて居る。ぢつと立つて居ると、太平洋の響が、轟――鏜と大きな拍子をつくつて窟内に押込んで來る。

きしなに宿の主婦に申入れさせて置いた御神樂の支度が出來た知らせに、いざとばかり素足の砂を拂つて、床の低い拜殿ににじり上り、御神樂を拜見する。男舞である。簫笛の音の澄んだ中を、太平洋が鏜――鏜と雄大無雙の鼉鼓をうつ。神代の氣分が總身に浸みわたる。舞終つて樂止み、舞人の御幣が頭の上に輕く觸れた時、自然に頭が下つた。

土盃の神酒を戴く。燒酎であつた。

參拜終つて、一歩洞窟の胎内を出ると、天空に海洋に漲る朝の光が身を包む。今母胎を出た赤兒の如く、我儕は眩しい光に瞬いた。玉垣の外には、夫婦石・雀石・扇石・二柱石・桝形石など、それ〴〵の狀をした黃土色の巨岩が、白波(沸る)海中に立ち、蹲み、さながら神窟を護して、攻寄する太洋と永劫の戰を續けて居る。東に向うて光の中に暫く無念無想に佇む。

千早ぶる神代の昔さながらに
鵜戸の窟に朝日さすなり。(死の蔭に)

二六　待賢門の戰　平*治物語

*鎌倉時代の軍記

左衞門佐重盛五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、「此の門の大將軍は信(一)頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衞門佐重盛、生年二十三。」と名のり懸けければ、信頼返事にも及ばず、「それ防げ。侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。「我先に。」と逃げければ、重盛いよ〳〵勇みて大庭の椋の木のもとまで攻附けたり。

義朝是を見て、「惡(二)源太はなきか。信頼と云ふ大臆病人が、待賢門をばはや破られつるぞや。彼の敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて、驅けられけり。續く兵には、鎌田兵衞・後藤兵衞・佐々木源三・秦野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・

(一)藤原信頼
(二)源義平

岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を並べて馳向ふ。

待賢門の戰

大音聲を揚げて、「此の手の大將は誰人ぞ。名のれ、聞かん。斯く申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歳、武藏大倉の軍の大將として叔父帶刀先生義賢を打ちしより此の方、たび〳〵の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳。見參せん。」と五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひまはし、縱樣・横樣、十文字に敵をさつと蹴散らして、「葉武者どもに目な掛けそ。大將軍を組んで擊て。櫨匂の鎧に蝶の裾金物打つて黃桃花毛の馬に乘つたるこそ、重盛よ。おし雙べて組んで落ち、手捕りにせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門・新藤左衞門を始として百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太を始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻・右近の橘を七八度まで追ひまはして、「組まん〳〵。」とぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎、叶は

じとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ處に、筑後守つと參りて、「曩祖平*將軍の二度生れかはり給へる君かな。」と向ふ樣に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、また大庭の椋の木まで攻寄せたり。

また惡源太驅けむかひ、見廻していひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し、大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩すとも、今度に於ては餘すまじ。押しならべて組んで捕れ。兵ども。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎・同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武

*平貞盛

者所を始として百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太、弓をば小脇にかい挾み、鐙踏張り突立ち上り、左右の手を擧げ、「幸に義平、源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。寄れや、組まん。」と云ふまゝに、先の如く、大庭の椋の木の下を追廻して五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、また大宮表へ引いて出づ。

惡源太、二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝是を見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々驅けいるらめ。彼速かに追出せ。」と言遣されければ、俊綱馳せて此のよしを云ふに、「承り候。進めや、者ども。」

とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平は能く驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞ譽められける。

伊勢の人、元文三年歿す。
攝津の人、天明三年歿す。
江戸の人、享保十七年歿す。

二七　浮草

浮草やはるはあらしの岸にさく　中川乙由

みちのくれ刈藻花さく宵の雨　谷口蕪村

子やすらん、あるり雲はなる柳　杉風

攝津の人、元文三年歿す。
江戸の人、寶永四年歿す。
京都の人、寶永元年歿す。
伊勢の人、享保二年歿す。

北の海てどころなしやの秋　上島鬼貫

名月や、たゝみのうへに松ぼけ　榎本其角

岩ばなやうたゝも一人月の秋　服部嵐雪

ねる人はねて月はそれなり　涼菟

二八　わが國の海運

見よ、わが國の地勢を。北は露領を控へ、西は支那四百餘州に接し、南は濠洲及び、南洋諸嶋に對し、東は渺々たる煙波を隔てて遙かに南北亞米利加に向へり。地勢既に操舟に適せれば、我が國民は古來、風濤を冒して海上を濶歩したりし

に、不幸にして、一時鎖國政策の羈束に逢ひて、天馬伏櫪の情態にありしが、その一度厩を出づるや、勃然として元氣を回復して宇内を奔馳す。現今のわが海運の隆昌は四五十年の經營に過ぎずと雖も、その然る所以を惟ふに、國初より蘊蓄したる素養の發揮したるに外ならず。

わが國民は、蓋し、神代より造船・航運に努めて、海外に來往せり。素盞嗚尊は浮寶を作りて韓地に往來し、樹木を植ゑて船材とし、彦火火出見尊は無目籠を用ひて海國に渡り給ひきといふ。神武天皇の中原平定も、實に舟師の力に賴り給ひしなり。舳艫相銜みて韓國に驀進し、一舉にしてこれを征服し給ひしは、神功皇后の偉績にして、爾來、かの國はわれに服して、久しく朝貢を怠らざりき。齊明天皇の朝、阿倍比羅夫は蝦夷を嚮導とし、舟師二百艘を率ゐて、肅愼を擊ちたり。その後、韓國は叛服常なく、遂にわが國は意をその綏撫に絶つに至りしかど、既に善隣の誼を結べる唐國とは、依然として交際を厚くし、互に玉帛聘問せり。宇多天皇の朝、唐の大亂に會ひて、遣唐使を廢せられしかども、商船の私に支那に航するものはなほ尠なからざりき。

足利氏の世に至りて、義滿が明と修交せしが如き、八幡船が支那近海の民を震慄せしめしが如きは、姑く措く。その頃、西洋諸國は航海の術大に發達し、葡萄牙・西班牙の二國、特に海上に權力を擅にし、競うて東洋の經路に著目せり。かく

して、洋船のわが國に來航して貿易すると共に、邦人の遠西に渡航するもの少なからず。鎭西の大友氏(一)・有馬氏(二)等の使臣は葡船に搭じて、マドリード(三)に西班牙王に謁し、羅馬に法王を拜して、歸朝したり。

徳川家康通商に志あり。外船の寄港せるを欵待し、日本船の外航を奬勵し、上下合體して勢威を海外に張らんとせり。伊達政宗はその臣支倉六右衞門(四)を羅馬(五)に遣して、西洋諸國の形勢を視察せしめ、蒲生氏郷も使節(六)を同地に派遣せしこと前後四回に及べり。濱田彌兵衞(七)は臺灣に航し、わが民の財物を劫奪せる蘭人に逼りてこれを賠償せしめ、山田長政(八)は暹羅に渡りて國事に大功あり、國王の女を娶りて封侯の榮を得たり。

(一)大友宗麟
(二)有馬義純
(三)西班牙の首府
(四)名は常長
(五)慶長十八年
(六)天正十二年以來
(七)長崎の商人、寛永頃の人。
(八)駿河の人、寛永頃の人。

こゝに、外國交通の致命傷たりしは、天主教徒の非望の發覺にして、家康はこれより異教の禁を嚴にせり。その後、尙禁を犯す者絕えざりしかば、家光は遂に峻酷なる鎖港の制を布きて、外人の來航を遏め、たゞ和蘭のみ、他意なきを以て、明と共に、長崎一港に限り、船舶の數を定めて、貿易することを許し、曩に許可したりし朱印船をも停めて、邦人が海外の渡航を許さず、又、五百石積以上の船を製することを禁じたり。敢爲・冒險、東海・南洋に馳驅して葡西二國と角逐したる國民の精神は、この制に桎梏せられて、萎靡沈滯せること二百餘年、海運も纔かに江戸・大阪を中心とせる近海の漕航に止る

に至れるぞ是非なかりし。

(一)ペリーの來訪は國民の惰眠を覺醒する警鐘なりき。幕府は世界の趨勢に鑑みて大船製造の禁を解き、歐米諸國と通商假條約を締結し、又、外國渡航の禁を廢せり。かくして、幕末の世、內外の交通更に興りて、以て明治維新に及べり。

明治政府は開國進取を以て國是とし、人民に洋船所有を奬勵し、廢藩と共に幕府諸藩の所有船を集め、之を民間に貸下げて、汽船會社を起さしめたり。是卽ち日本國郵便蒸氣會社にして、わが國における航洋汽船會社の嚆矢なりき。この會社は、內部の紛擾と外船の競爭との爲に、久しからずして瓦解せしが、土佐の(二)岩崎彌太郎、別に三菱會社を起して海

(一)北米合衆國の水師提督。嘉永六年六月、浦賀に來る。

(二)明治二十二年歿す。

運の業を營みしに、功績頗る揚り、社運隆々として年々に榮えたり。後、共同運輸會社起りて、これと對抗し、頡頏して相下らざりしが、數年ならずして、競爭の弊に堪へず、合併して日本郵船會社と稱せり。これと前後して、また大阪商船會社の設立あり。二社共に今盛に漕運に從事せり。

明治における海運の發達の急速なりしは、眞に人をして驚倒せしむ。日露戰爭の起りし明治三十七年の海運力を以てその元年のに比するに、頓數五十四倍餘の增加を見る。その後の進歩も亦想見するに難からざるべし。今やわが汽船は東南兩洋より進んで歐米に航路を開き、煙を噴き潮を蹴て天下を橫行し、世界の大汽船會社と對立して、堂々と

して優等の位置を占む。地理を以て比較すれば、わが國は恰も東洋の英國なり。英國は海運を以て邦家の生命としこれに倚つて立ち、これに依つて強盛なるに、われはいまだその道程の半にも達せず。前途は遠く、希望は大なり。勉めざるべけんや。

獨逸の現皇帝、嘗ていはく、「吾人の將來は、水上に在り。」と。顧ふに、今後列國の平和的爭衡は、陸上にあらずして、水上に在らん。而して、海運の消長が國家の盛衰に關することは、古代のヴェニス・ジェノアに驗し、中古の葡・西・蘭に證し、又、今の英・米・獨・佛に徵して明かなり。然らば、則ち、天賦の海國たるわが國は、今より益〻海國的經營を完備して、以て世界の大海運國たらんことを期せざるべからず。（大隈重信著開國五十年史に據る）

（一）伊太利の港。
（二）伊太利の港。
（三）侯爵、前內閣總理大臣

四訂女子國語讀本卷七終

大正八年二月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

四訂 女子國語讀本 全十册

明治三十五年一月三日 初版發行
明治三十五年二月十六日 再版正訂發行
明治三十六年二月十日 三版正訂發行
明治三十七年十月七日 四版正訂發行
明治三十九年二月十九日 五版正訂發行
明治四十年八月 六版正訂發行
明治四十年十二月七日 七版正訂發行
明治四十四年十 八版正訂發行
大正元年三月十日 九版正訂發行
大正四年三月十一日 二十版正訂發行
大正七年二月十日 三十版正訂發行
大正八年二月十日 四十版正訂發行
大正八年二月十日 印刷

定價
卷一、二、三、四、九、十 各金參拾六錢
卷五、六、七、八 各金參拾錢

大臨時九年度定價
卷一、二、三、四、九、十 各金六十一錢
卷五、六、七、八 各金五十一錢

不許複製

著作者 吉田彌平
同 小島政吉
同 篠田利英
同 岡田正美

印刷兼發行者 東京市日本橋區本町三丁目十七番地 金港堂書籍株式會社
代表者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 原亮一郎
印刷所 東洋印刷株式會社

發賣所 東京市日本橋區本町三丁目十七番地 金港堂書籍株式會社
賣捌所 各府縣特約販賣所

第二學年西班
牙語小說